

第3章 発掘調査成果

1 トレンチの配置

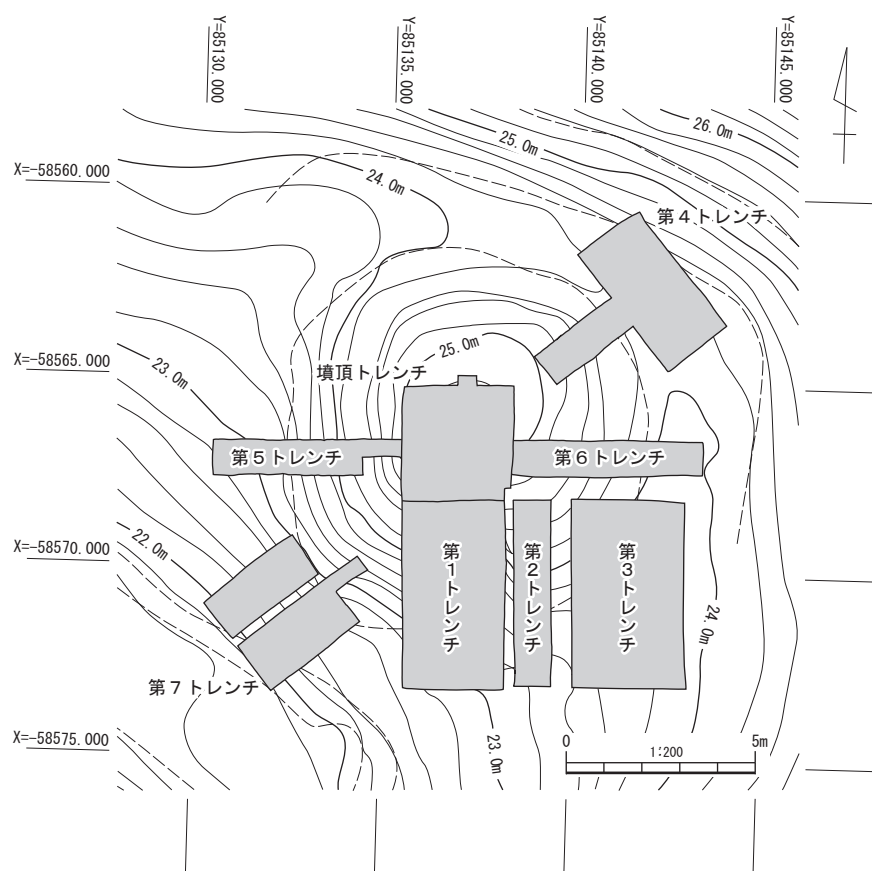
発掘調査では、明らかにすべき調査課題に応じて、墳丘の各所にトレンチを設定した（第8図）。調査課題は大きく三つに整理される。すなわち、①墳丘形態・規模を把握すること、②墳丘構造の一端を明らかにすること、③埋葬施設の形態・規模・構造を確認することである。

①墳丘形態・規模を把握するために、第3トレンチ（第2次調査）、第4トレンチ（第4・5次調査）、第7トレンチ（第5次調査）を設定した。これらトレンチでは、墳丘裾の位置を平面的に把握することを主な目的とし、これを土層断面からも確認するため必要に応じてサブトレンチを設定した。

②墳丘構造の一端を明らかにするために、第2トレンチ（第2次調査）、第5トレンチ（第4・5次調査）、第6トレンチ（第5次調査）を設定した。これらのトレンチでは、幅1mを基本として墳丘裾の位置を確認し、あわせて墳丘構造を把握するためのサブトレンチを設定して土層断面の観察・記録をおこなった。

③埋葬施設の詳細を確認するために設定したのは、第1トレンチ（第2次調査）と墳頂トレンチ（第3・5次調査）である。これらのトレンチでは、埋葬施設の形態・規模・構造にかかわるデータを得るため、埋葬施設の縦断方向と横断方向に土層観察畔を設定して調査を実施した。また、必要に応じてサブトレンチを設定しながら、埋葬施設の構築過程を明らかにするための材料を得ることに努めた。

調査面積は① 35 m²、② 15 m²、③ 21.5 m²であり、発掘調査総面積は約 71.5 m²となる。（岩本）



第8図 トレンチ配置図

2 墳丘形態の調査

① 第3トレンチ (第9・10図、図版1～3)

古墳の墳形や墳丘裾を一定範囲にわたって平面的に確認することを目的として、墳丘南東側に設定した。トレンチ規模は東西幅約3m、南北長約5m、面積約15㎡である。

層序 基本層序は最上層から順に表土、流土、盛土、地山である。

表土(西壁1層、北壁1層、東壁1層、南壁1層)は黒褐色を呈し、10cm程度の厚みで調査区全面に堆積する。

流土(西壁2～4層、北壁2～4層、東壁2～4層、南壁2・3層)は、5～30cm程度の厚さで斜面に沿って堆積し、調査区内の広範囲におよぶ。

地山(北壁6層、東壁5層)は、調査区内の北壁の標高の低い部分と東壁で確認している。土色や土質が隣接する第2トレンチで地山と判断した土層(第2トレンチ東壁11層)と同じであり、対応する土層とみられる。なお、調査範囲においては、旧表土は確認できていない。調査区が丘陵のより上部に位置するため、旧表土は墳丘築造にかかわる整地の際に削り出されたと考えられる。

墳丘 墳丘は主に盛土によって構成されるが、北側の下方では盛土を確認できず、地山削り出しによって整形される。墳丘上部には盛土(西壁5層、北壁5層)がほどこされる。土色と土質が共通する点から、第2トレンチの盛土(第2トレンチ東壁6層)との対応関係を想定できる。墳丘下部には、約5～35cmの厚さで10度程度の傾きをもって調査区外へと平坦面を形成する土層(西壁6層、南壁4層)がある。この土層は、墳丘外にまでおよんでいることから、整地の際の盛土と考える。整地層は、標高の低い南側のみにみられ、トレンチの大部分には広がらない。

墳丘下部には、傾斜の変換(西壁6層上面、北壁6層上面)がある。北壁では東端から約60cmの地点の標高約23.1m付近、西壁では南端から約1.6mの地点の標高約23.2m付近に傾斜変換がみられる(第9図-▼)。葺石や列石などの外表施設は確認できないことから、調査区北部ではこの地山の傾斜変換を墳丘裾とし、調査区南西部では整地にもなう盛土の傾斜変換を墳丘裾とする。古墳の平面形態は、南北と東西が直線的な形状を示し、屈曲部は鈍角となって短い直線的な部分がみられる。

遺物出土状況 表土からは須恵器片、土師器片が、流土中から須恵器片が出土した。整地土からは土師器片等が出土している。いずれも少数の出土である。墳丘面直上からは、器種や時期のわかる須恵器が比較的まとまって出土している(第10図)。(柴田)

② 第4トレンチ (第11図、図版4・5)

墳丘裾の平面的な把握と土層の堆積状況から規模・形態を確定し、築造方法を明らかにすることを目的として、墳丘北東側に設定したトレンチである。トレンチ規模は南北幅約1m、東西長約4.5m、面積約4.5㎡である。さらに墳丘裾をより広範囲に確認するために、調査区の東壁に沿って南北長約4m、東西幅約2m、面積約8㎡の拡張区を設定した。トレンチの総面積は、約10.5㎡である。

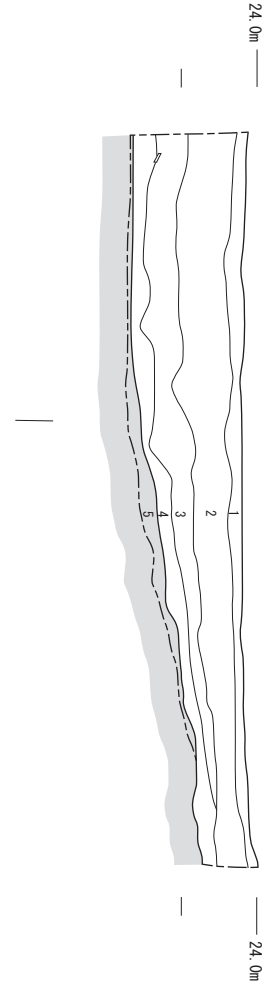
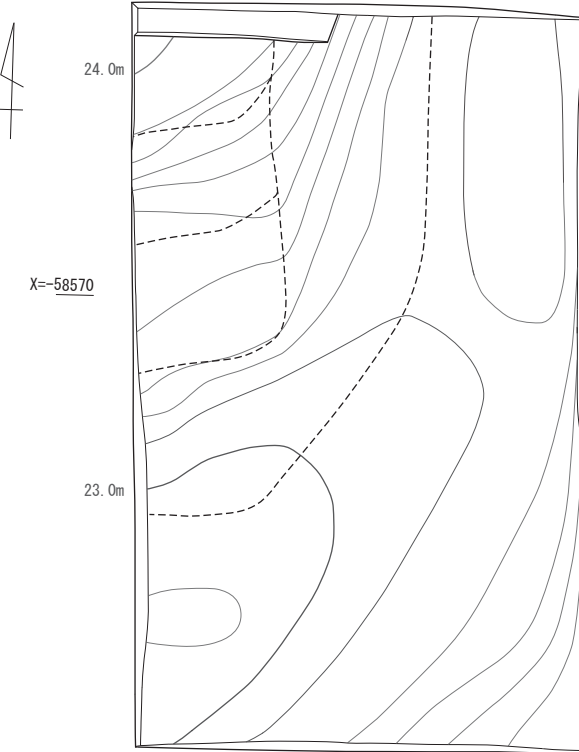
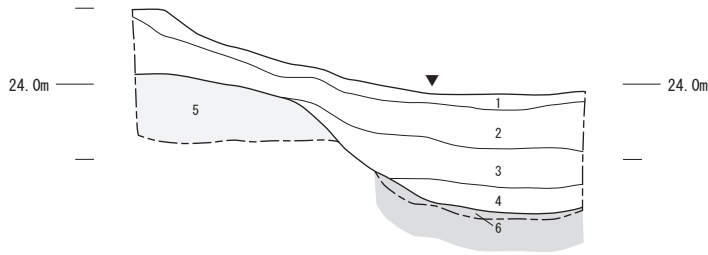
層序 基本層序は、最上層から順に表土、流土、盛土、地山である。

最上層である表土(A-A'断面1層、西壁1層、B-B'断面1層、北壁2層、南壁1層、東壁2層)は、調査区全体に約5～15cmの厚みの黒褐色極細砂である。

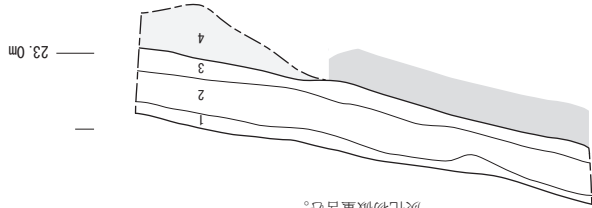
流土(A-A'断面2・3層、B-B'断面2・3層、北壁3・4層、南壁2・3層、東壁3・4層)は約25～60cmの厚みをもつ。斜面に沿って下方へと厚く堆積することから流土と判断した。

【北壁】

- 1 表土 10YR2/3 黒褐色極細砂
- 2 流土 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 3 流土 10YR4/6 褐色細砂
- 4 流土 10YR3/3 暗褐色シルト
- 5 盛土 10YR4/4 褐色シルト中量含む。
7.5YR3/4 暗褐色シルト
- 6 地山 7.5YR4/6 褐色シルト

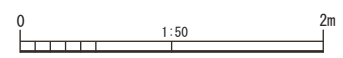


- 1 表土 10YR2/3 黒褐色極細砂
- 2 流土 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 3 流土 10YR4/6 褐色細砂
- 4 流土 10YR3/3 暗褐色シルト
- 5 盛土 10YR4/4 褐色シルト中量含む。
7.5YR3/4 暗褐色シルト
- 6 地山 7.5YR4/6 褐色シルト

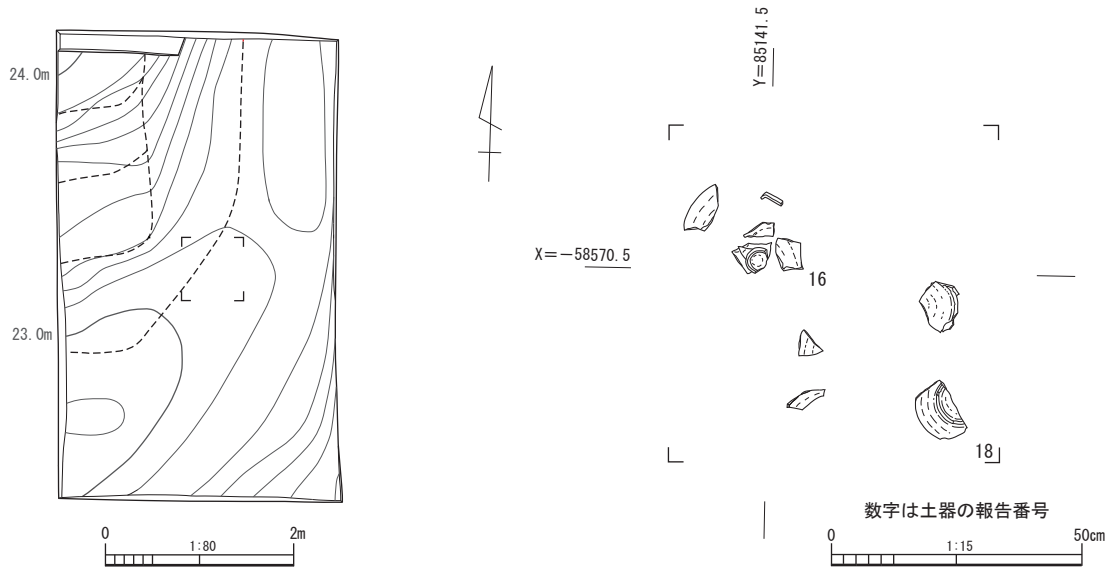


- 1 表土 10YR2/3 黒褐色極細砂
- 2 流土 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 3 流土 10YR4/6 褐色細砂
- 4 流土 10YR3/3 暗褐色シルト
- 5 地山 7.5YR4/6 褐色シルト

- 1 表土 10YR2/3 黒褐色極細砂
- 2 流土 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 3 流土 10YR3/3 暗褐色シルト
- 4 盛土 10YR4/4 褐色シルト中量含む。
10YR5/6 黄褐色シルト



第9図 第3トレンチ平面図・壁面図



第10図 第3トレンチ遺物出土状況図

最下層には土質が均一でしまりの強い褐色シルト層（A-A' 断面7層、B-B' 断面4層、北壁5層、南壁4層、東壁5層）がある。東に向かってなだらかにいったん下降したのち（第11図-▼）、さらに東へと高くなる。周辺地形から、丘陵に由来する地山であると判断した。遺物はまったく出土していない。なお、地山上に旧表土は確認できない。（手島）

墳 丘 下部は地山を削り出し、上部は盛土をほぼ水平にほどこすことで墳丘を築造している。

最上部の盛土（A-A' 断面4層、西壁3層）は、厚さ約20cmの褐色シルトである。その下の盛土（A-A' 断面5層、西壁4層）は、凝灰岩片を微量含む暗褐色シルトで約30cmの厚みをもつ。最下部の盛土（A-A' 断面6層）は、褐色シルトと明褐色シルトの混合土からなり、厚さ約20cmで堆積する。

墳丘下部では、A-A' 断面の東端から約1mの地点、北壁の西端から約20cmの地点、南壁の西端から約40cmの地点、標高約23.3m付近に傾斜の変換がある。葺石や列石などの外表施設を確認できないことから、この傾斜変換を墳丘裾と考える。

傾斜変換を平面的にとらえると、裾は東西と南北にやや直線的な形状となり、屈曲部が鈍角となって直線に近い短辺を構成する。方墳でも隅を切ったような形状か多角形に近い形状となろう。（佐藤）

遺物出土状況 表土からは土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が、流土からは土師器、須恵器、陶器、磁器が出土した。盛土の出土遺物は、土師器と須恵器である。いずれも細片であり、少数が散在的に出土している。（手島）

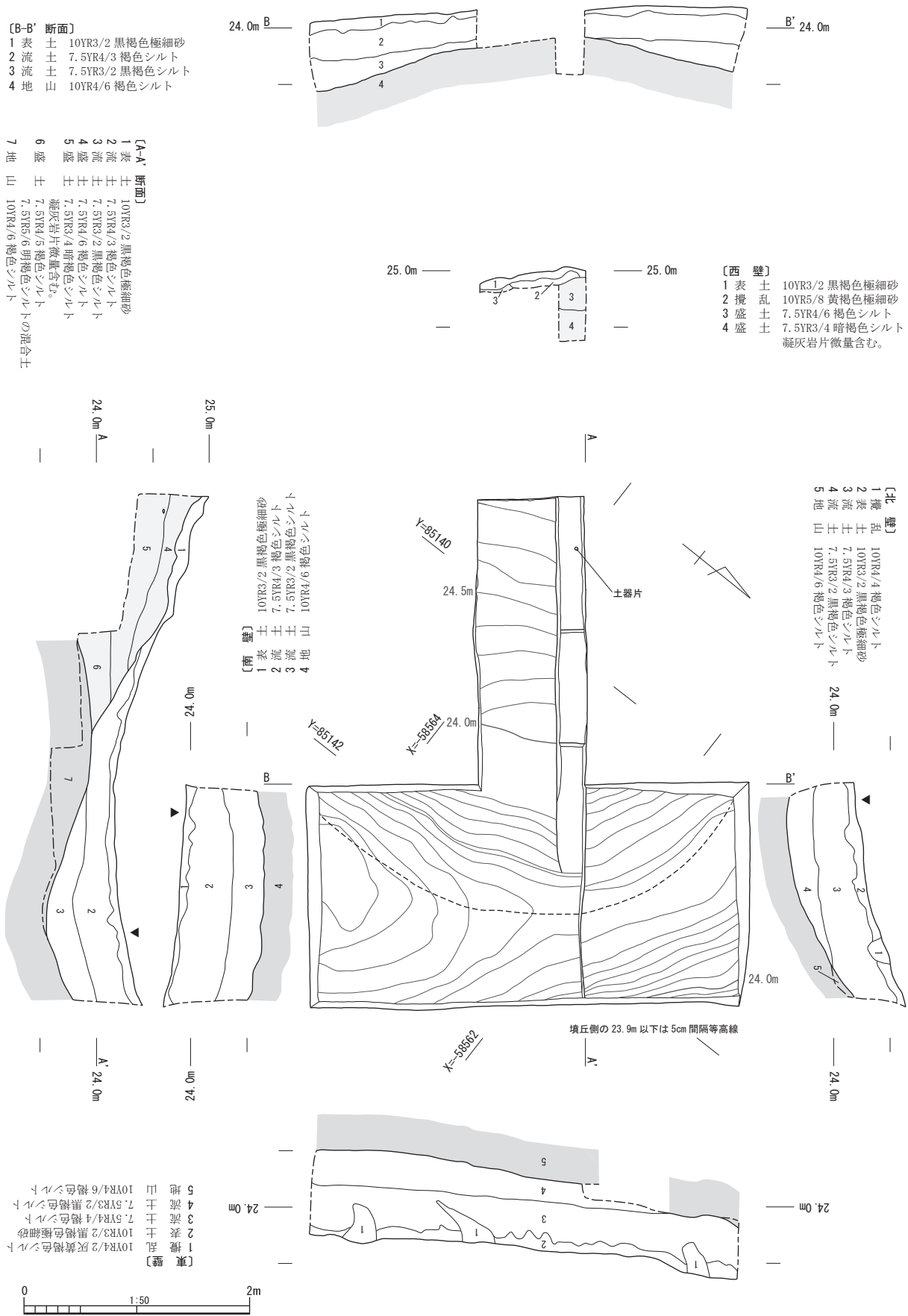
③ 第7トレンチ（第12図、図版6・7）

墳丘裾の平面的な把握と土層の堆積状況から、墳丘形態・規模を確定し、古墳の築造方法を明らかにすることを目的として墳丘の南西側に設定したトレンチである。トレンチ規模は南北幅約3m、東西幅約3m、面積約9㎡である。なお、土層の堆積状況をより詳細に把握するために、調査区の東側に南北幅約50cm、東西長約1m、面積約0.5㎡のサブトレンチを拡張した。総面積は9.5㎡である。

層 序 基本層序は、最上層から順に表土、流土、盛土、地山である。

表土（A-A' 断面1層、北壁1層、B-B' 断面1層、南壁1層、C-C' 断面1層、東壁1層、西壁1層）は、調査区全体に薄く堆積する黒褐色極細砂である。

流土（A-A' 断面3層、北壁2層、B-B' 断面2層、南壁2層、C-C' 断面2層、東壁2層、西壁2層）



第11図 第4トレンチ平面図・断面図・壁面図

は、約10～30 cmの厚みをもつ。斜面に沿った堆積状況から流土と考える。

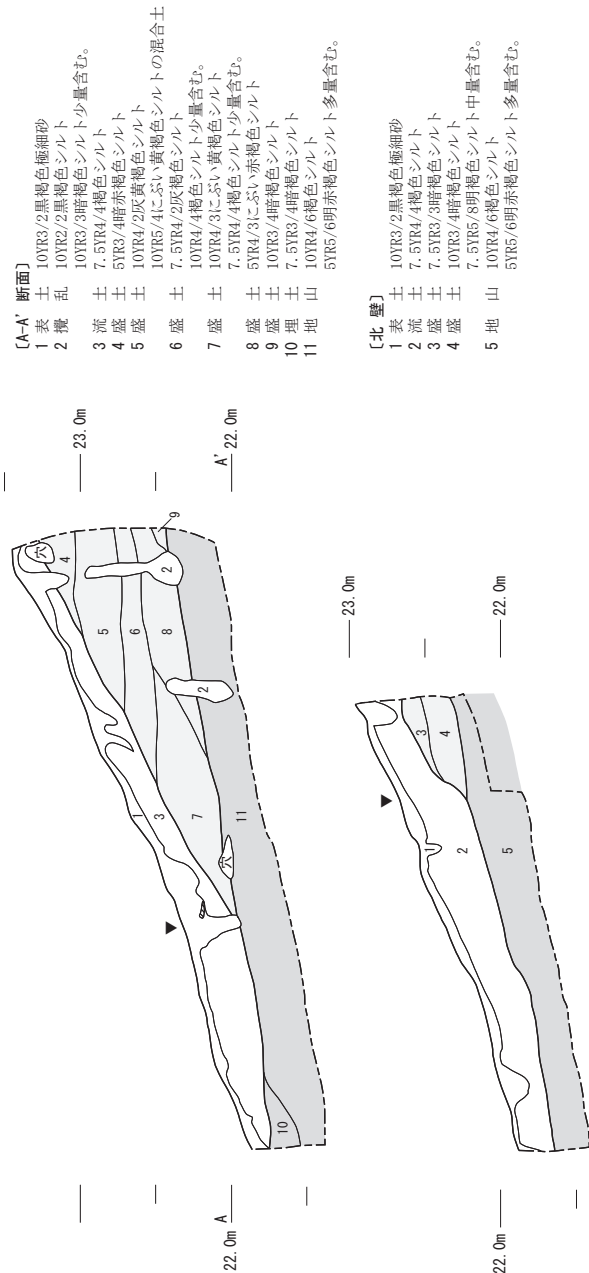
最下層（A-A' 断面11層、北壁5層、B-B' 断面6層、南壁4層、C-C' 断面8層、東壁6層、西壁4層）は、褐色シルトを主体として明赤褐色シルトが混じる固くしまった均質な土層である。この土層は調査区全体に広がり、遺物が出土しないことから、地山と考える。旧表土とみられる土層は確認できない。トレンチ西端には、地山上に厚さ20 cmに満たない暗褐色シルト層があり（A-A' 断面10層、B-B' 断面5層、西壁3層）、古墳の築造に先立つ遺構埋土と考える。（中井）

墳丘 墳丘は、地山を平坦に削り出した上に盛土をほどこすことによって築造する。

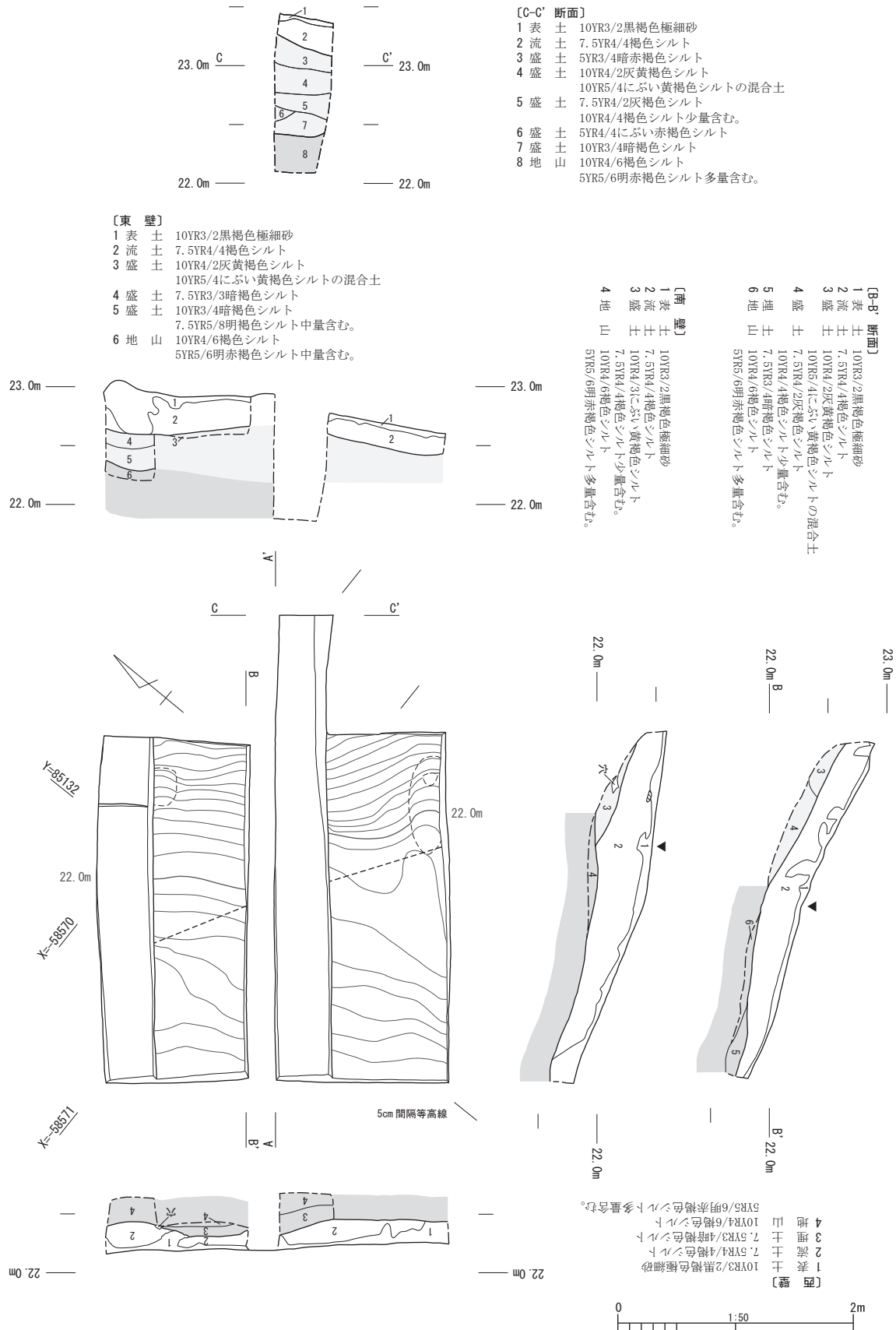
最上部の盛土（A-A' 断面4層、C-C' 断面3層）は、暗赤褐色シルトを呈し、厚さは25 cm以上となる。その下の盛土は、灰黄褐色シルト（A-A' 断面5層、B-B' 断面3層、C-C' 断面4層、東壁3層）と暗褐色シルト（北壁3層、東壁4層）であり、約30 cmの厚さになる。さらにその下の灰褐色シルト層（A-A' 断面6層、B-B' 断面4層、C-C' 断面5層）と暗褐色シルト（北壁4層、東壁5層）も墳丘中央より外側へと厚みを増し、最大20 cm程度となる。これらの盛土はいずれも水平に堆積し、それぞれが墳丘構築にみる一定の段階を反映した盛土の大きな単位ととらえる。

地山面の上にほどこされた盛土は、複数の小さな単位によって、水平面をなす大きな単位を構成する。墳丘の外側が最大40 cmほどと厚く、墳丘の内側は25 cm程度とやや薄い。にぶい黄褐色シルト（A-A' 断面7層、南壁3層）、にぶい赤褐色シルト（A-A' 断面8層、C-C' 断面6層）、暗褐色シルト（A-A' 断面9層、C-C' 断面7層）という、色調は異なるが近似した土質の盛土を、墳丘内側から外側へと順にほどこし、上面を平坦にする。最下部の盛土は、それより上部の盛土とくらべて厚さは変わらないが、平面的により細かくほどこされるという特徴がある。

墳丘下部では、A-A' 断面の西端から約1.5 mの地点にある標高約21.9 m付近の盛土と地山の



第12図



第7トレンチ平面図・断面図・壁面図

境界、北壁の西端から約1 mの地点の標高約21.8 m付近の地山、南壁の西端から約2 mの地点にある標高約22.0 m付近盛土と地山の境界において傾斜が変換する(第12図-▼)。葺石や列石などの外表施設は確認できないことから、この傾斜変換を墳丘裾と考える。土層断面の傾斜変換の状況を総合すると、墳丘裾はトレンチの長軸に斜交するやや直線的な形状となる。したがって、円墳であるとは考え難く、多角形墳あるいは方墳でも隅を切ったような形態となる可能性が想定される。(鍵)

遺物出土状況 表土、流土、盛土から、土師器と須恵器の細片が散在的に出土した。出土数は少ない。残存率は低い器種や時期のわかるものに、表土から出土した須恵器の甕と蓋環がある。(犬山)

3 墳丘構造の調査

① 第2トレンチ(第13図、図版1・7)

墳丘裾の位置を特定して規模を確認するとともに、墳丘構造を把握することを目的として墳丘の南側に設定したトレンチである。トレンチ規模は東西幅約1 m、南北長約5 m、面積約5 m²である。

層序 基本層序は最上層から順に表土、流土、盛土、旧表土、地山である。

表土(東壁1層、西壁1層、北壁1層、南壁1層)は黒褐色を呈し、約5～20 cmの厚さで調査区全体に堆積する。

流土(東壁3～5層、西壁3～5層、南壁2・3層)は、約20～50 cmの厚さで調査区の斜面に沿って広範囲に堆積する。調査区の北部には、流土上面から盛土までを掘り込む攪乱坑(東壁2層、西壁2層、北壁2層)がある。この攪乱坑は調査区内にとどまらず、西側に広がりを見せており、第1トレンチの北東部に位置する攪乱坑と一連をなすものとする。

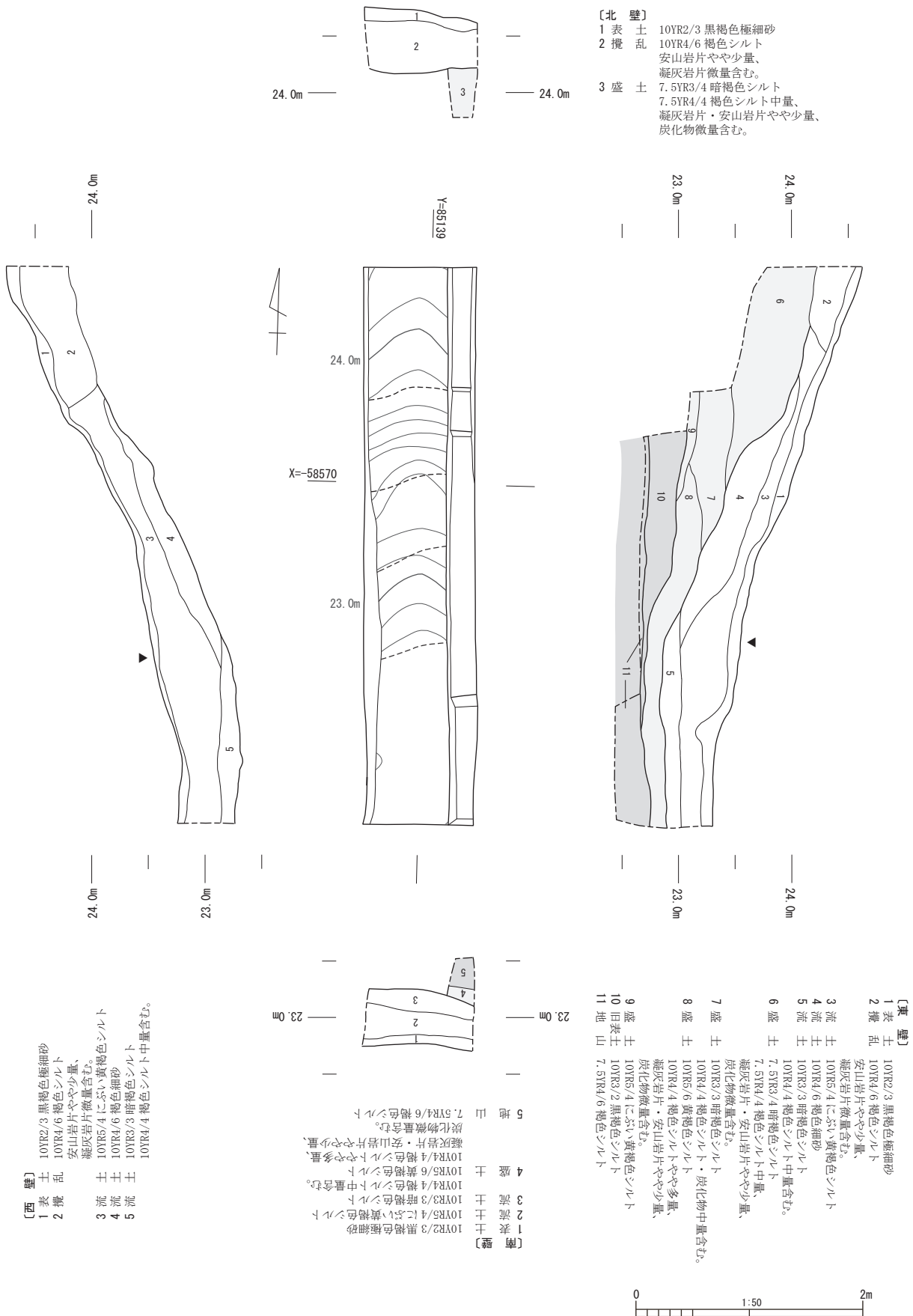
黒褐色シルト層(東壁10層)は、5～30 cm程度の厚みをもって基本的には水平に堆積するが、南側に向かうにつれて厚みを減じ、調査区南側では確認できない。南側付近においては、この土層は墳丘築造時に削り出された可能性がある。この層からは、弥生土器など古墳に先行する遺物が出土している。また、上層の黄褐色の盛土とは明確に異なる黒褐色の色調を呈すること、後述する下層の地山と考えられる土層と同様に水平に広がりをもつことから、旧表土と判断した。

旧表土の下層(東壁11層、南壁5層)には、色調が黄褐色を呈し、水平に広く堆積する土層がある。遺物が出土せず、土層がサブトレンチ下方さらには調査区外にまで続く点から、地山と考える。

墳丘 墳丘は、旧表土とその上にほどこされた盛土から構成される。盛土は、暗褐色土と黄褐色土をベースに褐色土を含む混合土からなり、4大別できる。

最上部の盛土(東壁6層、北壁3層)は暗褐色を呈し、褐色シルトブロックを中量、約5～10 mmの凝灰岩片をやや少量含む。確認できる範囲で水平方向に2 m程度、厚さ約50 cmという大きな単位で堆積する。その下の盛土(東壁7層)は暗褐色を呈し、褐色シルトブロックと炭化物粒を中量含む。水平方向に1.4 m程度、約30 cmの厚さで堆積する。上から3層目の盛土(東壁8層)は、黄褐色を呈し、褐色シルトブロックをやや多量、凝灰岩片をやや少量含む。厚さ約20 cmで旧表土直上に堆積し、その範囲は調査区外にまで達しており、墳丘築造に際する整地にもなう盛土である可能性が高い。最下部の盛土(東壁9層)は、にぶい黄褐色を呈する土層であり、約10 cmの厚さで堆積するが、部分的な確認にとどまる。なお、東壁6・8層の盛土中には、埋葬施設とくに玄室に由来すると思われる凝灰岩片が含まれる。埋葬施設の構築時に玄室石材の整形を現地でおこなった可能性がある。

墳丘の傾斜は、西壁で標高約22.4 m、東壁で標高約22.3 mの地点で平坦となる。東壁、西壁においては、トレンチ南端から約1.5 m付近にある(第13図-▼)。平坦面は、傾斜変換の南側へと続き、



第13図 第2トレンチ平面図・壁面図

調査区外へとおよぶ。この調査区では、葺石や列石などの外表施設を確認できなかったため、傾斜変換を墳丘裾と考える。

遺物出土状況 弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量出土した。表土、流土からは、土師器片や須恵器片が出土している。盛土からも土師器、須恵器が出土しているが、いずれも残存率は低い。原位置を保つと考えられる遺物も確認できなかった。旧表土からは、弥生土器片や土師器片など古墳に先行するとみられる遺物が出土した。(立谷)

② 第5トレンチ (第14図、図版8・9・21・22)

墳丘裾の位置を特定して規模を確認するとともに、墳丘構造を把握することを目的に墳丘の西側に設定したトレンチである。トレンチ規模は南北幅約1m、東西長約5m、面積約5㎡である。

層 序 基本層序は、最上層から順に表土、流土、盛土、地山である。

表土(北壁1層、南壁1層)は黒褐色極細砂であり、調査区全体に約2～30cmの厚さで堆積する。

その下、明黄褐色極細砂(北壁7層)がトレンチ上方に堆積し、脆い部分があること、やや不均質であること、黄色く変色する部分に根があることから、墳丘盛土が攪乱を受けたものとする。なお、この層は墳頂トレンチの攪乱層(第16図A-A'断面10層)と対応する。

流土(北壁3～6層、南壁2～4層)は、約20～60cmの厚さで調査区全体に堆積する。墳丘の斜面に沿う堆積状況から流土と判断した。

最下層(北壁48層、南壁7層)には、均質でしまりの強い褐色シルト層がある。広範囲に確認できる点や、遺物がまったく出土しないことから、地山であるとする。

なお、地山面において複数の遺構を検出した(北壁43～46層)。規模が東西約45～55cm、南北50cm以上の溝状の遺構と考えられ、丘陵の傾斜に直交してのびると推定される。いずれも遺構の底面が平坦ではない。ほかにも、地山面では赤褐色シルトを含む黒褐色シルトの堆積(北壁47層、南壁6層)を確認している。未掘であるため規模など詳細は不明である。いずれも検出面が地山上面である点から、古墳築造以前の遺構と考える。旧表土とみられる土層は確認できず、これら遺構の上部と旧表土は、築造時の整地ともなって削平されたとする。(千賀)

墳 丘 旧地形をほぼ平坦に削り出し、その上に盛土をほどこすことで墳丘を築造している。玄室は、標高23.4m前後で水平に堆積する層(北壁34層)の上面に設置される。

玄室天井石の下端となる標高約24.3mより上層(北壁8～12層)は、厚さ約20～30cmの大きな単位の盛土である。玄室天井石を覆うように、第5トレンチ、墳頂トレンチ、第6トレンチにわたって広範囲に堆積する。

玄室天井石の下端となる標高約24.3mより下層(北壁13～33層)では、比較的細かな単位の盛土と水平かつ広範囲におよぶ盛土とを交互にほどこす。これらの盛土のあいだには、玄室に由来する凝灰岩片を多量に含む間層がみとめられる。

まず、標高約24.3m付近には、厚さ約5～20cmで水平に広く堆積する明褐色シルト層(北壁13・14層)がある。これらの土層の上面は玄室天井石下端に接し、標高が一致することから、玄室天井石を架構する際の基盤をなしたと考えられる。

その下には、褐色系のシルト層からなる盛土が、水平方向に80cm程度、厚さ約15cmを主体として比較的細かな単位で複数ほどこされる(北壁16～22層)。

細かくほどこされた盛土の下層にある、褐色シルト層(北壁24層)は凝灰岩片を微量含み、水平方向に約3mと広く、最大で厚さ約40cmという大きな単位をなし、上面は平坦になる。

さらにその下には、水平方向に90 cm程度、厚さ15 cm程度を中心とする細かな単位の盛土が複数積み重なる(北壁25～32層)。(若山)

玄室棺身の西側にほどこされた盛土の間層として、凝灰岩片が多量かつ面的に広がる土層(北壁15・23・26・33層)がある。間層は4層を確認できるが、上から3層は水平方向に30～80 cmと限られた範囲にみとめられる。そのなかにあつて、最下層の暗褐色シルト層(北壁33層)は、玄室左側壁外面から西へ約3.5 m地点までと広範囲に堆積する。玄室左側壁外面から西へ約1.4 m地点までの比較的玄室に近い範囲では、加工痕をとどめた9～18 cm程度の大ぶりの凝灰岩片が密集する。それより西には1～5 cm程度の小ぶりの凝灰岩片がまばらに広がるが、局所的に小ぶりの凝灰岩片がまとまる状況を確認している。また、暗褐色シルト層(北壁33層)と褐色シルト層(北壁34層)の間には、土層として確認することはできなかったが、細かな凝灰岩片がまばらに広がる黒褐色を呈する硬化面を平面的にとらえることができた(北壁34層上層)。これらの凝灰岩片は玄室石材と同じであり、とくに加工痕をとどめた石材は玄室に近接し、玄室基底面より上層にあることから、現地で玄室を加工する際に生じた剥片であると考え。(福本)

玄室基底面より下層の盛土(北壁34～42層、南壁5層)は、平坦に削った旧地形の上にほどこされる。玄室基底面より上層の盛土とは異なり、いずれも水平方向に約0.8～1.5 mの範囲、約20～30 cmの厚みを持ち、比較的大きな単位である。とりわけ、暗赤褐色シルト層(北壁37層)は水平方向に約3 mという広い範囲に堆積する。明褐色シルトを少量含む褐色シルト層(北壁34層)の上面は、玄室基底面と標高を同じくすることから玄室設置面に相当すると考える。

墳丘下部では、調査区の西端から北壁では約1.5 m、南壁では約1.1 m地点、標高約22.4～22.5 m付近に傾斜変換(北壁48層上面、南壁7層上面)を確認できる(第14図-▼)。葺石や列石などの外表施設を確認できないことから、この傾斜変換が墳丘裾であると考え。なお、墳丘斜面には平坦面を確認できず、段築はみとめられない。(若山)

遺物出土状況 表土から須恵器、流土から土師器、盛土から土師器と須恵器、盛土間層から凝灰岩の石材加工剥片が出土した。また、古墳築造以前の遺構からは土師器、須恵器が出土した。いずれも細片であり散在的に出土するが、間層中の石材加工剥片は玄室付近でまとまりをみせる。(福本)

③ 第6トレンチ(第15図、図版10・11・21・22)

墳丘裾の位置から規模を確定するとともに、墳丘構造を把握することを目的に墳丘の東側に設定したトレンチである。トレンチ規模は、南北幅約1 m、東西長約5 m、面積約5 m²である。

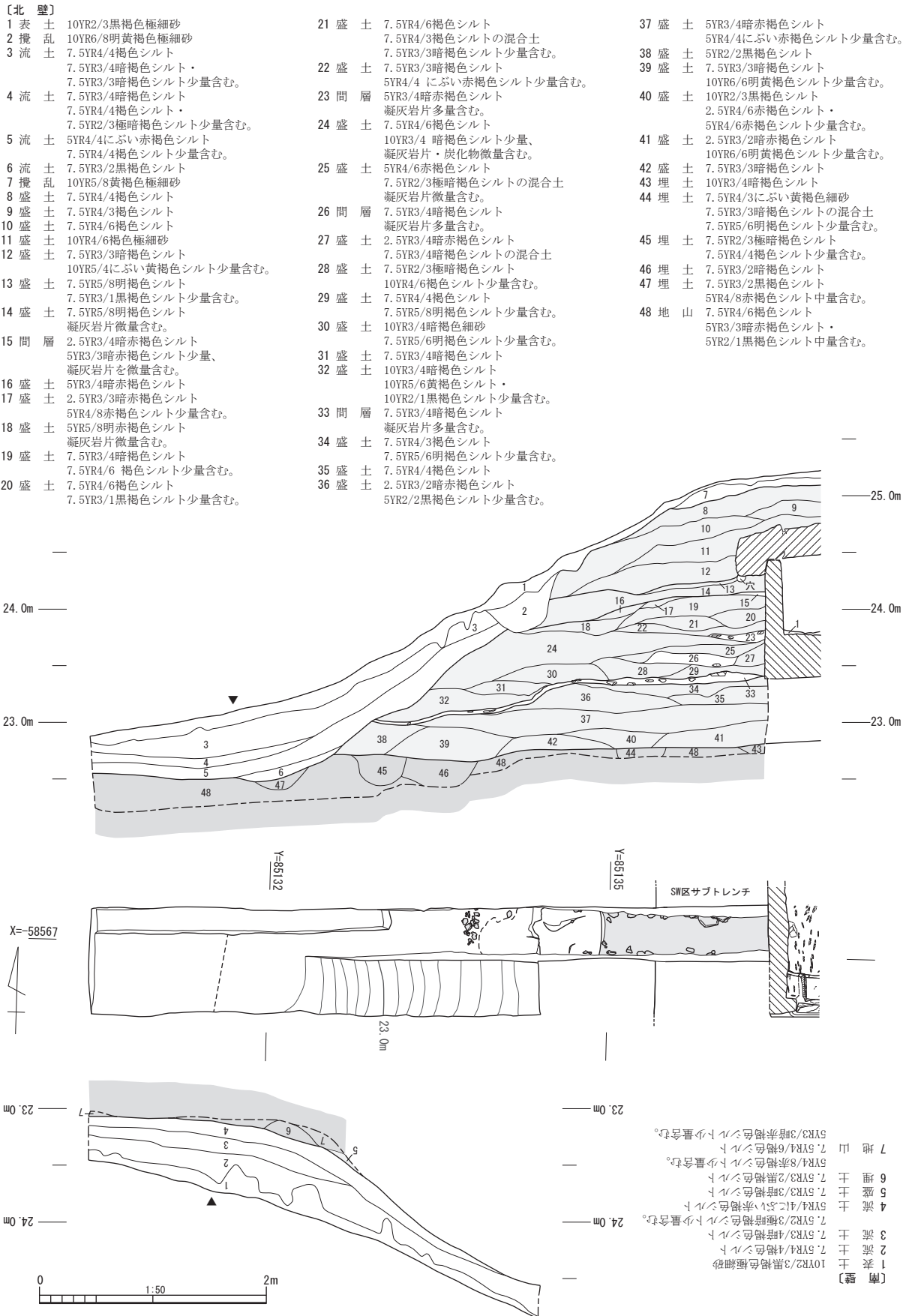
層序 基本層序は最上層から順に、表土、流土、盛土、地山である。

表土(北壁1層)は黒褐色極細砂層であり、約3～20 cmの厚みで調査区全体に堆積する。

調査区上部の表土下には、厚さ約10～20 cm程度の黄褐色極細砂層(北壁6層)が堆積する。この土層は、脆い部分があること、やや不均質であること、黄色く変色する部分に根があることから、墳丘盛土が攪乱を受けたものと判断した。土質と土色が類似することから、墳頂トレンチの攪乱層(第16図A-A'断面10層)と一連のものとする。

表土下の層(北壁2・5層)は、約8～70 cmの厚みを持ち、墳丘の斜面に沿って下方に向かうにつれて厚く堆積するため、流土と判断した。なお、調査区の上方に一部に堆積している層(北壁3・4層)は、流土上面から盛土までを掘り込んでいるため、攪乱であると考え。

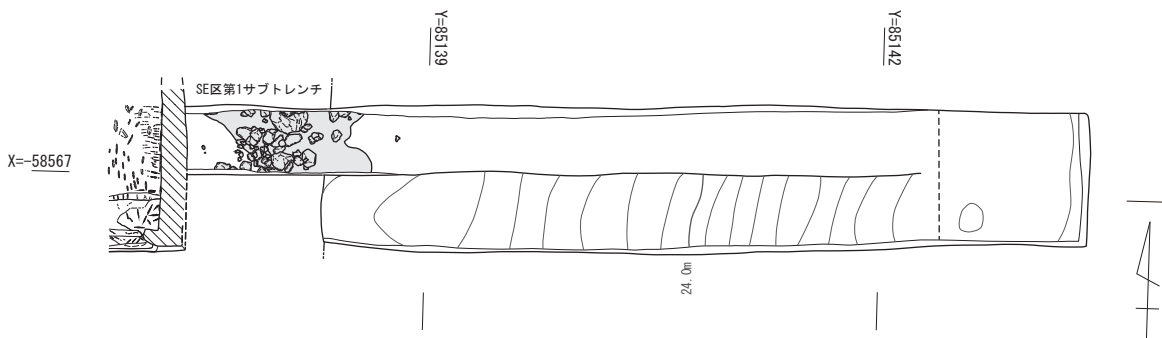
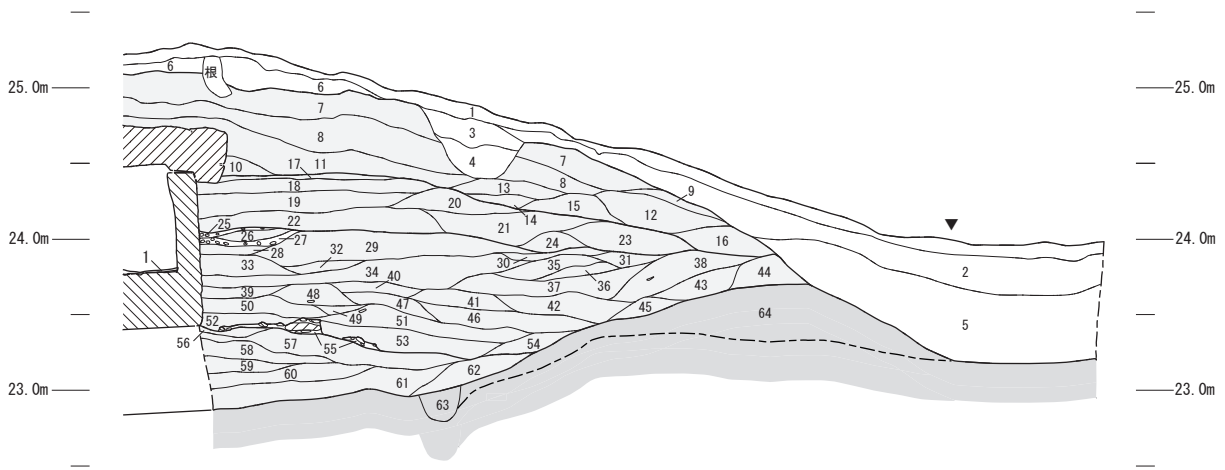
最下層(北壁64層)には均質でしまりが強く、東から西へとおおよそ低くなる暗褐色極細砂層がある。遺物が出土しない点、広範囲にわたって確認できる点から、地山と判断した。地山は玄室から



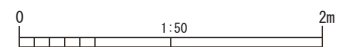
第14図 第5トレンチ平面図・壁面図

〔北 壁〕

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 表 土 10YR2/3黒褐色極細砂 | 20 盛 土 10YR5/8黄褐色シルト | 37 盛 土 10YR3/4暗褐色シルト |
| 2 流 土 10YR4/6褐色シルト | 7.5YR3/4暗褐色シルトの混合土 | 凝灰岩片微量含む。 |
| 3 攪 乱 10YR5/6黄褐色極細砂 | 21 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 38 盛 土 10YR3/3暗褐色シルト |
| 4 攪 乱 10YR4/6褐色シルト | 10YR2/3黒褐色シルトの混合土 | 39 盛 土 7.5YR6/6橙色シルト |
| 5 流 土 7.5YR3/2黒褐色シルト | 22 盛 土 7.5YR3/2黒褐色シルト | 40 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト |
| 10YR2/1黒褐色シルトまばらに含む。 | 10YR4/4褐色シルトの混合土 | 7.5YR6/6橙色シルトの混合土 |
| 6 攪 乱 10YR5/8黄褐色極細砂 | 23 盛 土 10YR4/6褐色シルト | 41 盛 土 7.5YR3/2黒褐色シルト |
| 7 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 24 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 7.5YR5/8明褐色シルト少量含む。 |
| 8 盛 土 7.5YR4/3褐色シルト | 25 間 層 7.5YR7/8黄橙色粗砂 | 42 盛 土 7.5YR4/3褐色シルト |
| 9 盛 土 7.5YR4/6褐色シルト | 凝灰岩片多量含む。 | 43 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト |
| 10 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 26 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 44 盛 土 10YR5/6黄褐色シルト |
| 11 盛 土 10YR4/6褐色極細砂 | 27 間 層 7.5YR7/8黄橙色粗砂 | 45 盛 土 10YR4/6褐色シルト |
| 12 盛 土 10YR3/4暗褐色シルト | 凝灰岩片多量含む。 | 46 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト |
| 7.5YR3/4暗褐色シルト中量含む。 | 28 盛 土 7.5YR5/8明褐色シルト | 10YR5/6黄褐色シルトの混合土 |
| 13 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 29 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 47 盛 土 7.5YR5/4にぶい褐色極細砂 |
| 7.5YR6/8橙色シルト・ | 10YR3/3暗褐色シルトの混合土 | 48 盛 土 7.5YR5/3にぶい褐色シルト |
| 10YR2/2黒褐色シルト中量含む。 | 30 盛 土 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 7.5YR6/8橙色シルト粒まばらに中量含む。 |
| 14 盛 土 7.5YR5/6明褐色シルト | 31 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 7.5YR5/4にぶい褐色極細砂 |
| 15 盛 土 7.5YR5/8明褐色シルト | 32 盛 土 7.5YR4/3褐色極細砂 | 7.5YR5/6明褐色極細砂の混合土 |
| 16 盛 土 7.5YR4/6褐色シルト | 33 盛 土 5YR4/4にぶい赤褐色極細砂 | 50 盛 土 7.5YR4/2灰褐色極細砂 |
| 17 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | 7.5YR6/8橙色シルトやや多量含む。 | 51 盛 土 10YR3/3暗褐色シルト |
| 凝灰岩片・安山岩片微量含む。 | 34 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 52 盛 土 7.5YR4/3褐色極細砂 |
| 18 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 35 盛 土 10YR4/6褐色シルト | 7.5YR3/3暗褐色極細砂の混合土 |
| 19 盛 土 7.5YR4/6褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルト少量含む。 | 53 盛 土 7.5YR3/2黒褐色シルト |
| | 36 盛 土 7.5YR4/4褐色シルト | 54 盛 土 7.5YR3/4暗褐色極細砂 |
| | 10YR2/3黒褐色シルト中量含む。 | 55 間 層 7.5YR6/6橙色粗砂 |
| | | 凝灰岩片多量含む。 |



- | | |
|-----------------------|------------------------------------|
| 56 盛 土 10YR3/3暗褐色極細砂 | 61 盛 土 7.5YR5/6明褐色極細砂 |
| 7.5YR6/8橙色シルト中量含む。 | 62 盛 土 7.5YR5/4にぶい褐色シルト |
| 57 盛 土 10YR4/4褐色極細砂 | 63 埋 土 7.5YR4/4褐色細砂 |
| 10YR5/8黄褐色極細砂の混合土 | 炭化物中量含む。 |
| 58 盛 土 7.5YR4/6褐色シルト | 64 地 山 7.5YR3/3暗褐色極細砂～10YR4/4褐色極細砂 |
| 59 盛 土 10YR3/2黒褐色シルト | 10YR5/4にぶい黄褐色シルトまばらに少量含む。 |
| 60 盛 土 7.5YR3/4暗褐色シルト | |



第 15 図 第 6 トレンチ平面図・壁面図

東へ1.6 m付近まで比較的平坦だが、そこから高さを増し、玄室から4 m地点より低くなる。

なお、地山を掘り込む古墳築造に先行する遺構を確認した（北壁63層）。幅約25 cm、深さ約20 cmの底面が丸みをもつ溝状の遺構であり、サブトレンチに直交する方向にのびる。地山の上層に旧表土とみられる土層は確認できなかった。（笠見）

墳丘 墳丘は、旧地形を削り出した上に、大部分を盛土によって構築される。

玄室天井石の下端にあたる標高約24.4 mより上層（北壁7～16層）には、厚さ40 cm程度の第5トレンチまで連続する大きな単位の盛土（北壁7～9層）がある。これらの盛土は玄室天井石を覆うようにほどこされる。また、墳丘の端の部分にあたる盛土（北壁11～16層）は、水平方向に50～90 cm、7～23 cmの厚みをもって土手状の高まりを形成する。

玄室天井石下端、標高約24.4 mより下層（北壁17～62層）では、黄橙色系、褐色系、灰色系のシルト層や細砂層が約5～15 cmの厚さで堆積する。比較的細かな単位の盛土と水平かつ広範囲におよぶ盛土とを交互にほどこす。盛土のあいだには、玄室に由来する凝灰岩片を多量に含む間層がある。

まず標高約24.4 m付近には、暗褐色シルト層（北壁17層）が5 cm程度の厚みをもって、水平方向に約1.1 mの比較的広い範囲にわたって堆積する。その下の3層（北壁18・19・22層）も同様に、それぞれ約8～15 cmの厚さで広く水平に堆積する。これら4層（北壁17～19・22層）は広く水平に堆積し、かつ玄室天井石下端の標高とほぼ一致することから、玄室天井石を搬入・架構するための基盤をなした土層と考えられる。

標高約24.0 m付近には、凝灰岩を多量に含む黄橙色粗砂層（北壁25・27層）がある。標高約24.0～23.4 mの範囲の盛土（北壁20・21・23～54層）は、水平方向に70 cm程度、5～10程度の厚さで堆積する。上層と比べて、単位が小さく薄い盛土である。墳丘の端にあたる盛土（北壁38・43～45層）は、厚さ20 cm程度であり、土手状にほどこされる。

標高23.4 m付近には橙色粗砂層（北壁55層）が、厚さ10 cm程度、水平方向に約1 mにわたって堆積する。玄室の石材と同じ凝灰岩の粉碎土と凝灰岩片からなる土層である。玄室右側壁外面から東へ1.2 m地点までの比較的狭い範囲に堆積するが、玄室右側壁外面から約10～40 cmの近接する範囲にはみられない。橙色粗砂層（北壁55層）を構成する凝灰岩片のほとんどは、玄室右側壁外面から東へ約40～90 cmの限られた範囲に密集する。大ぶりの凝灰岩片は、とくにこの範囲に集中する。この橙色粗砂層が玄室東側の比較的狭い範囲にしか確認できない点は、玄室西側（第5トレンチ）とは様相を異にする。なお、これに対応する土層は玄室周辺のほかの場所でもほぼ同じ標高で確認できる。橙色粗砂層の凝灰岩片のなかでも、大ぶりのものには加工痕をとどめる剥片がある。玄室の石材と同一であることから、橙色粗砂層（北壁55層）と凝灰岩片は現地で玄室を加工する際に生じたものとみられる。さらに、間層の下面にあたる暗褐色細砂層（北壁56層）と褐色極細砂層（北壁57層）の上面は、玄室基底面と高さがほぼ同じであり、玄室の設置面に相当すると考える。

玄室基底面より下層の盛土（北壁56～62層）は、約5～20 cm程度の厚みをもって、薄く水平に堆積する。

調査区内では、東端から約1 m、標高約23.2 mの位置で傾斜が変換する（第15図一▼）。葺石や列石などの外表施設が確認できないため、この傾斜変換を墳丘裾と考える。傾斜変換は地山削り出しによって形成される。なお、墳丘斜面には平坦面が確認できず、段築はみとめられない。（田中）

遺物出土状況 表土から土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が、流土からは土師器、須恵器が出土した。盛土からは土師器、須恵器が出土し、盛土間層から凝灰岩の石材加工剥片が出土している。遺物はいずれも破片となって散在して出土するが、石材加工剥片は玄室付近でまとまりをみせる。（飯田）

4 埋葬施設の調査

廻原1号墳の埋葬施設については、発掘調査を実施する以前から露出していたため、これまでもある程度の状況が明らかとなっていた。主軸をほぼ正南北をとり、墳丘の南側に開口する横穴系の埋葬施設である。

発掘調査では、埋葬施設の形態・規模・構造を明らかにするために、埋葬施設を含む墳丘南側と墳頂部分を対象に調査区を設定した。墳丘南側の第1トレンチと、埋葬施設上部の墳頂トレンチとを区画して調査に着手したが、最終的には一連のトレンチとして調査を実施した。第1トレンチは、東西幅2.5m、南北長5m、面積12.5㎡である。墳頂トレンチは、東西幅約3m、南北長約3m、面積約9㎡である。埋葬施設にかかわる調査面積は、およそ21.5㎡となる。

以下やや煩雑となるが、第1トレンチと墳頂トレンチで確認した墳丘にかかわる所見を報告したのち、埋葬施設の調査成果について言及する。なお、墳頂トレンチにおける玄室天井石設置のための作業面より下位については、墳丘構造の確認を目的に設定した第5・6トレンチから調査区が連続するため、調査所見を峻別できない。したがって、その部分については、第5・6トレンチの報告内容（第3節第2・3項）と後述する墳頂に設定したサブトレンチの報告内容（第4節第4項）をあわせて参照されたい。（岩本）

（1）層序と墳丘

① 第1トレンチ（第16・17図、図版1・12・13）

層 序 基本層序は最上層から順に表土が全面に、流土が広範囲に堆積する。流土の下層には盛土があり、その下には旧表土を確認できる。

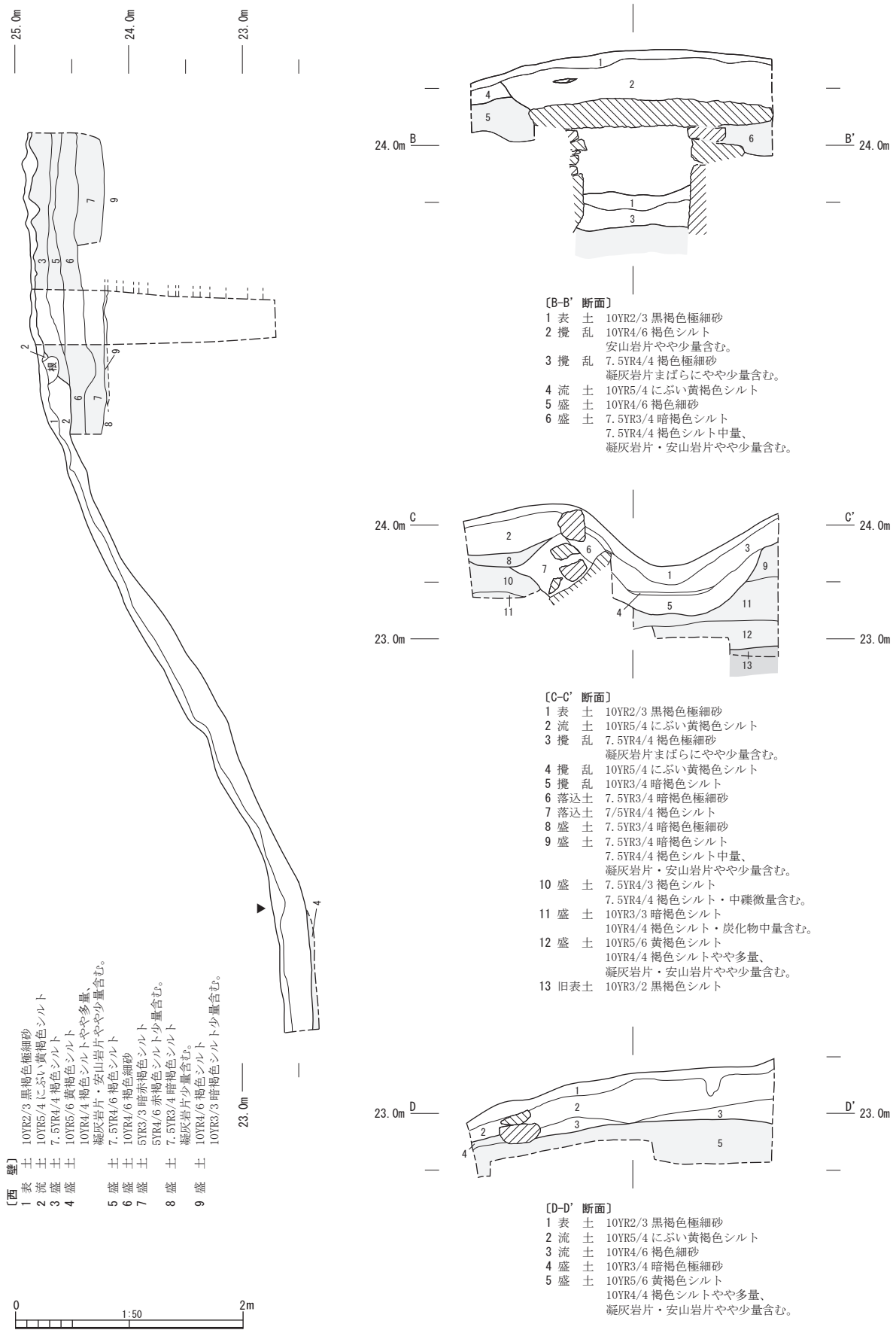
表土（A-A' 断面1層、西壁1層、B-B' 断面1層、C-C' 断面1層、D-D' 断面1層）は、黒褐色を呈し、厚さ約10cmで堆積する。

流土（A-A' 断面8・9層、西壁2層、B-B' 断面4層、C-C' 断面2層、D-D' 断面2・3層）は、約10～40cmの厚みをもち、調査区上方から下方にかけて斜面に沿うように広範囲に続く。その堆積は、下方に向かうにつれて厚くなる。また、調査区北東には、流土上面から盛土にまで達する掘り込み（A-A' 断面4～7層、B-B' 断面3層、C-C' 断面3～5層）がある。この大規模な掘り込みは、埋葬施設に近い位置にあることや断面形状から人為的な攪乱坑と考えられる。

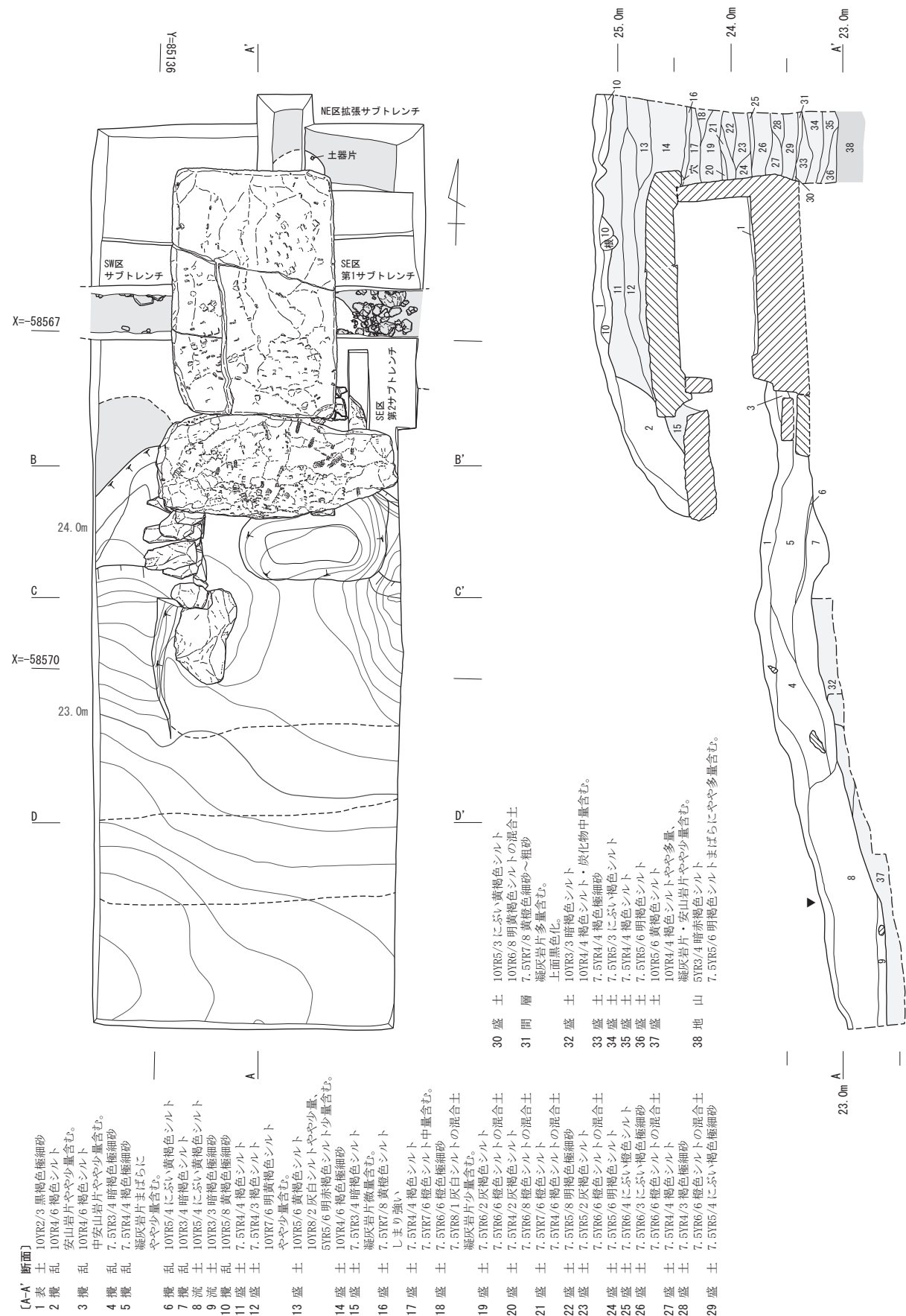
現状で最下層にあたる旧表土は黒褐色を呈し（C-C' 断面13層）、標高約23.0m以下に堆積する。上層の盛土とは明らかに異なる土色であり、土器の細片が出土する。第2トレンチの旧表土（東壁10層）と標高がほぼ同じであることから、この土層は旧表土であると考えられる。

墳 丘 墳丘は、大部分が盛土によって構成される。確認できる範囲内において盛土（C-C' 断面8～12層）は、旧表土（C-C' 断面13層）の上に、厚さ約25～30cmを一単位として堆積する。また、盛土は褐色土や暗褐色土、黄褐色土の混合土をベースとし、混合比に差のある土層を水平方向に積み重ねる。この盛土の単位の差は、墳丘築造の作業単位と関係する可能性が高い。

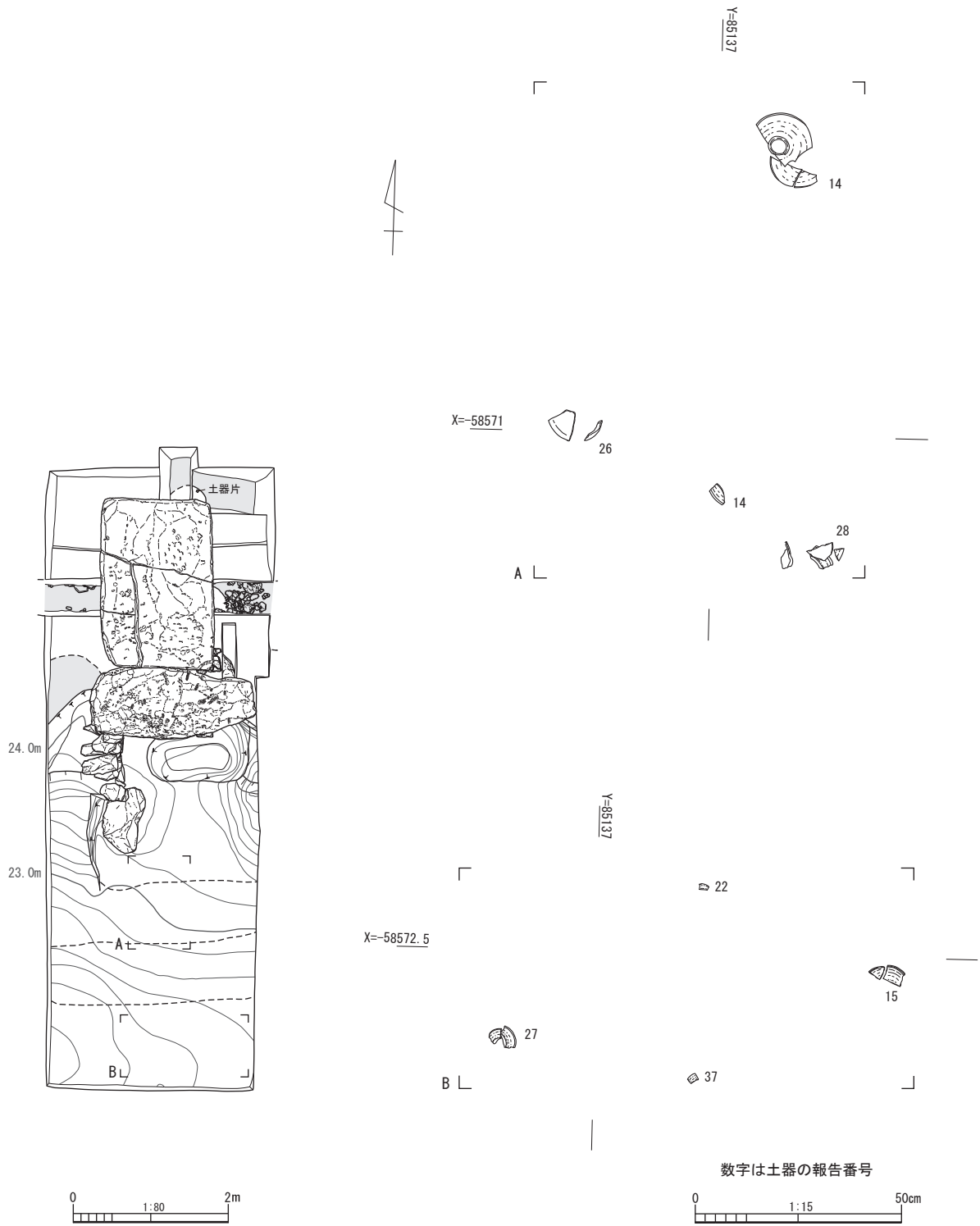
第1トレンチでは盛土と確実に視できる土層（A-A' 断面37層、西壁4層）が墳丘外にもおよぶ。その盛土は、西壁において調査区南端から約1.1mの地点、標高約22.4m付近で傾斜が変化し平坦となる（第16図-▼）。傾斜変換より南側の平坦面が、そのまま調査区外へと続く点は、この盛土が墳丘の造成にともなう整地土である可能性を示す。なお、墳丘を区画する溝などは検出されず、葺石



第16図 第1トレンチおよび墳頂トレンチ



平面図・断面図・壁面図



第17図 第1トレンチ遺物出土状況図

や列石といった外表施設にかかわる石材も確認できない。トレンチの南側の広範囲は後世に改変を受けている可能性があり、築造時の墳丘の状況は不明である。しかし、測量図で確認できる傾斜の変換部分も考慮するならば、整地にともなう盛土の傾斜変換が墳丘裾にあたると考える。

遺物出土状況 出土遺物には土師器と須恵器の細片があり、ほとんどは流土中や攪乱坑内から出土した。また、須恵器の細片は墳丘盛土からも出土する。出土遺物の総数はほかと比べてもっとも多い。

なお、器種の明らかな比較的遺存状態の良好な須恵器が、墳丘面直上からまとまって出土した（第17図）。それらのなかには、古墳の築造年代を直接反映するかはともかく、本来の形状をほぼ保つことから、原位置に近い状態をとどめると考えるものがある。これら須恵器は時期的にまとまりをなし、古墳に関連する一定の行為を反映した土器群とみなすことが可能である。（鈴木）

② 墳頂トレンチ（第16図、図版9・11・14・15）

層 序 墳頂トレンチの基本層序は、最上層から順に表土、流土、盛土、地山となる。

表土（A-A' 断面1層、B-B' 断面1層、西壁1層）は、調査区の全体に約5～15cmの厚みをもって堆積する黒褐色土層である。

流土（西壁2層）は、厚さ約10～20cmのにぶい黄褐色シルト層であり、第1トレンチの下方にまで斜面に沿って連続する土層である。流土の上面には盛土に達する、厚さ約30～50cmの掘り込み（A-A' 断面2層、B-B' 断面2層）を確認できる。土質と土色が共通することから、第2トレンチで検出した攪乱坑（第2トレンチ東壁2層、西壁2層、北壁2層）と一連のものであろう。規模は長軸約4.0m、深さ約1.5mであり、平面形は長い楕円形をなすと考えられる。埋葬施設に近い位置にあることや流土上面から掘り込まれていることから、人為的なものと判断した。

また、調査区内には厚さ10～30cm程度となる黄褐色極細砂層（A-A' 断面10層、第5トレンチ北壁7層、第6トレンチ北壁6層）が広く堆積する。この土層は、脆い部分があること、やや不均質であること、黄色く変色する部分に根があることから、墳丘盛土が攪乱を受けたものと認識した。

墳頂トレンチの調査では、すでに第5・6トレンチの調査所見で述べたように（第3章第3節第2・3項参照）、地山の直上に盛土がほどこされておられ、旧表土に相当する土層を確認するには至っていない。旧表土は古墳の築造に際して削り出されたと考えられる。

墳 丘 表土下の土層（A-A' 断面10層、第5トレンチ北壁7層、第6トレンチ北壁6層）は、調査区の広範囲にほぼ水平に堆積することから、本来は盛土であった可能性が高い。ただし、色調や土質が墳丘に設定したトレンチの流土層と酷似するため、二次的な改変を受けた土層と認識した。

その下には、褐色シルト層（A-A' 断面11層、西壁3層、第5トレンチ北壁8層、第6トレンチ北壁7層）がある。標高約24.6～25.0mの間に、約5～25cmの厚さで堆積する。調査区全体に広がり、強いしまりをもつこと、おおむね水平に堆積することから、これ以下を確実な盛土と判断した。

つづいて、暗褐色土と褐色土、明褐色土、黄褐色土からなる混合比を異にする土層（A-A' 断面12・13層、B-B' 断面5・6層、西壁5層、第5トレンチ北壁9・10層、第6トレンチ北壁8層）がある。これらの土層は、標高約24.6～24.9mの間に墳丘の北側、西側、東側においてほぼ水平に堆積する。

また、標高約24.4～24.9mにおいて、埋葬施設の上部を覆うように堆積する褐色土層（A-A' 断面14層、第5トレンチ北壁11層、第6トレンチ北壁11層）がみられる。この土層は調査区全体に約5～40cmの厚みをもって堆積し、調査区北側に向かうにつれて厚みを増す。

なお、以下の玄室天井石より下層の調査所見については、第5・6トレンチの報告内容（第3節第2・3項）と後述する墳頂に設定したサブトレンチの報告内容（第4節第4項）を参照されたい。

遺物出土状況 遺物は、盛土中から須恵器と土師器の細片が散在的に出土した。また、第5・6トレンチ（第3節第2・3項）の報告で上述し、後述する墳頂に設定したサブトレンチ（第4節第4項）の報告でもふれるように、玄室を設置した作業面上から玄室の加工に由来する石材加工剥片がまとまって出土している。（日浦）

(2) 埋葬施設の検出状況 (第16図)

調査前の埋葬施設は、羨道の天井石の下に高さ40cmほどの開口部があり、そこから羨道内部や玄室を観察することができた。羨道内部には壁体の半分弱の高さまで土が堆積し、羨道以外の範囲も土で埋没した状態にあった。いっぽう、玄室内部はわずかに土が堆積するのみであった。

検出作業は、玄室である石棺内部に堆積した土を除去しつつ、羨道とその南側の範囲の掘削作業を並行して進めていった。

玄室内部には、主に腐植土と考えられる土層(A-A'断面1層、第5トレンチ北壁1層、第6トレンチ北壁1層)が厚さ1~3cmほど堆積していた。堆積土から多数の釘を検出したが、いずれも丸釘で近現代のものと考えられる。慎重に精査をおこなったが、ほかに遺物は確認できなかった。

羨道内部では、表土の下層に厚さ20cmほどの褐色極細砂層(A-A'断面5層、B-B'断面3層、C-C'断面3層)が堆積していた。この土層を掘削する過程で、玄室に接する位置に重なった状態の2枚の長方形を呈する板状石材を検出した。2枚のうちの下石材は、玄室棺身のほぼ中央に接することから、原位置を保つ可能性が高い。また、下の板状石材が設置された面は、羨道側壁の基底面ともほぼ一致することから、羨道の床面と判断しうる。

羨道の南側では、表土を除去すると羨道から続く褐色極細砂層(A-A'断面5層、B-B'断面3層、C-C'断面3層)がみられた。褐色極細砂層の下層には、にぶい黄褐色シルト層(A-A'断面6層、C-C'断面4層)と暗褐色シルト層(A-A'断面7層、C-C'断面5層)を検出した。にぶい黄褐色シルト層は、羨道南端から連続してみられ、上層の褐色極細砂層の底に薄く溜まるように堆積していた。なお、これらの土層を除去する過程では、部分的に硬化面もみとめられた。表土以下の暗褐色シルト層までの土層は、羨道から第1トレンチの中程まで存在しており、土坑状の形態をなす攪乱と考えられる。

羨道の南側では、西側の羨道左側壁に連なる石積みを検出したのにたいし、東側の羨道右側壁からのびる石積みは確認できなかった。おそらく、第1トレンチ北東部を中心とする攪乱坑によって失われた可能性が高い。攪乱坑(A-A'断面2層、B-B'断面2層)は墳丘の上面から羨道天井石、羨道右側壁を経由して前庭部の床面にまでおよんでおり、羨道天井石上部からも羨道あるいは前庭部の壁体に由来するであろう石材が出土した。

また、羨道の左側壁に連なる壁体のうち、南半分ほどは石材同士がうまく組み合っておらず、石材間に土の流入がみられるなど、構築当初の姿を保っていない可能性が高い。羨道の左側壁に連なる壁体の南端には、側壁の基底石と思われる大形の石材が斜めに倒れかかった状態で検出された。地滑りや攪乱などの影響(C-C'断面6・7層)で斜めに倒れたものと思われるが、この基底石が倒れたため、その上部や周辺に積まれていた側壁の石材がずり落ちたり、組み合わせがずれたりしたものと推察しうる。

なお、玄室の設置面と羨道南側の床面にあたる土層(A-A'断面32層、C-C'断面11層)は、一連の土層と考えられる。また、この埋葬施設の床面を構成する土層は、第2トレンチ東壁7層の盛土と上面の標高がほぼ同じ高さであることから、対応する土層とみられる。さらに、第2トレンチ東壁6層・北壁3層は、第3トレンチ北壁5層・西壁5層と土色と土質が同じであり、標高もほぼ対応することから同一の土層である可能性が高い。これらの土層の広がりから、埋葬施設の設置は墳丘の築造と併行しておこなわれたものと考えられる。 (奥山)

(3) 埋葬施設 (第 18～22 図、図版 12～25・29)

埋葬施設にかんする発掘調査成果の具体的な内容を記述する前に、全体の構造について確認し、用語について整理しておく。廻原 1 号墳の埋葬施設は、横穴系の埋葬施設構造に即して、大きく三つの空間に区分しうる。すなわち、遺体を埋葬した空間としての「玄室」、「玄室」に至る前方の通路としての「羨道」、「羨道」のさらに前方に広がる空間としての「前庭部」に整理される。

ただし、廻原 1 号墳の玄室は、刳拔式石棺と形態・構造を同じくする。そのため、玄室の各部を説明する際に、下部については「玄室棺身」という変則的な記述を用いる。これにたいし、玄室の上部構造については、「玄室棺蓋」というよりも「玄室天井石」が実態に即している。「室」あるいは「棺」の定義〔和田 1986〕や表記の統一性という点では不適切などころもあるが、埋葬施設の形態と構造にみる実状をふまえて、上記の用語にもとづいて説明を進める。

なお、埋葬施設の規模は、前庭部から玄室までの全長が 7 m 程度になる点をあらかじめ述べておくこととしたい。各部の詳細な法量については、以下で個別に記述する。 (岩本)

① 玄 室 (第 18～22 図、図版 13～19・23・24・29)

玄室は、流紋岩質軽石火山礫凝灰岩 (通称：荒島石) を刳り抜いたものであり、形態は刳拔式石棺と共通する。棺身に相当する玄室棺身と、棺蓋に相当する玄室天井石をそれぞれ一枚岩でつくり出し、組み合わせる。玄室棺身の設置面は、おおむね標高 23.4 m 付近である。全体としての平面形態は長方形を呈する。玄室棺身の内部を箱形に、玄室天井石の内面は屋根形に刳り抜く。玄室の主軸は、 $N-1^{\circ} 37' 37'' - W$ にとり、北側がごくわずかに西へ振る。

棺 身 玄室棺身は直方体を箱形に刳り抜く。大きさは前壁側の南小口外面において、上面幅 95 cm 程度、底面幅 95 cm 程度、上面から下面までの高さ約 1 m である。南小口からの正面観は、隅丸の正方形に近い形状となる。棺身中央付近は幅約 1 m、高さ約 1 m であり、棺長は約 1.95 m である。奥壁側の北小口外面の高さは約 1.1 m であり、南側より北側が高い。壁面の傾斜はおおむね垂直となるが、北小口外面は上から 90 cm ほどがわずかに上すぼまりとなり、下から 20 cm 弱ほどは下すぼまりとなる。傾斜角度は上すぼまりの部分が 80 度程度、下すぼまりの部分が 110 度程度である。底面は南北がおおむね水平、東側がわずかに高く、西側がわずかに低い。底面の標高は 23.4 m 前後にある。

前壁側の南小口には、そのほぼ中央に位置する場所に、上部で幅約 40 cm、下部で幅約 47 cm、高さ約 35 cm の長方形の横口を穿ち、玄門を設ける。横口の下部には、横口とほぼ同じ幅で高さ 15～20 cm 程度にわたり、奥行 6～10 cm 程度の深い刳り込みを設ける。さらにその周囲には、幅約 55 cm、高さ 80 cm 弱におよぶ閉塞石を受けるための深さ 1～2 cm ほどのごく浅い刳り込みがある。この閉塞石を受ける刳り込み部分の平坦面は、横口の上部と左右が幅約 5 cm、下部が 20 cm ほどになる。横口の大きさがきわめて小さいという点を考慮するならば、横口から別の棺を挿入して埋葬した可能性は考えにくく、埋葬は玄室天井石がのせられる前に上からおこなわれたと考える。

箱形を呈する棺身刳り抜き部の大きさは、長さ 1.52～1.64 m、幅 64～71 cm、深さ 61～65 cm である。厚みは、南小口である前壁が 10～15 cm 程度、北小口である奥壁が 12～17 cm 程度、西側の左側壁が 20 cm 程度、東側の右側壁が 10～14 cm 程度である。奥壁は上部へと徐々に薄くなり、右側壁は上端付近で厚くなるなど、全体に厚みが不均衡ながらも薄いつくりである。底の厚さは、南側で少なくとも 35 cm 以上、北側で 40 cm 程度には達するとみられ、壁面部分と比較して底がきわめて厚い。

棺内床面の平面形態は、奥壁側が前壁側よりやや幅の広い長方形である。棺身の内部については、

左側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、右側壁は上部が西側にやや傾斜をもつ。床面は全体に南側へと7～8度ほどの傾斜をもって低くなる。

前壁内面の内側21～24 cmほどの範囲には、床面から5～6 cmの段差を介した高まりが存在する。この高まりの中央から西へ15～20 cmほど偏した位置には、幅3～4 cm、深さ4～5 cmの断面V字形の溝が切られる。ただし、この溝については、埋葬施設の製作時のものか、後世の二次的な加工によるものかの判断が難しい。石材を細かく削ることで溝をつくり出しており、V字をなしている対向する2つの斜面は、それぞれ工具によって削り込まれる方向を異にする。一方は斜面の傾斜に直交する方向に工具痕が残り、もう一方の斜面では傾斜に平行して工具痕がみられる。工具痕からうかがえる加工には、そのほかの部分の工具痕とは細かさにおいてやや違いがある。

棺内床面の表面には、チョウナ削り技法⁽¹⁾と想定される加工痕をとどめる部分がわずかにあるが、全体にチョウナ敲打技法とみられる深い加工痕が目立つ。いっぽう、棺内の四方の壁面では、チョウナ敲打技法と考える加工痕を確認できる部分は少なく、細かな面が連続して形成されるチョウナ削り技法による加工痕が顕著である。チョウナ敲打技法で粗く加工したのちに、チョウナ削り技法によって仕上げたものと考えられる。用いられた工具の幅は5 cm程度と推定される。

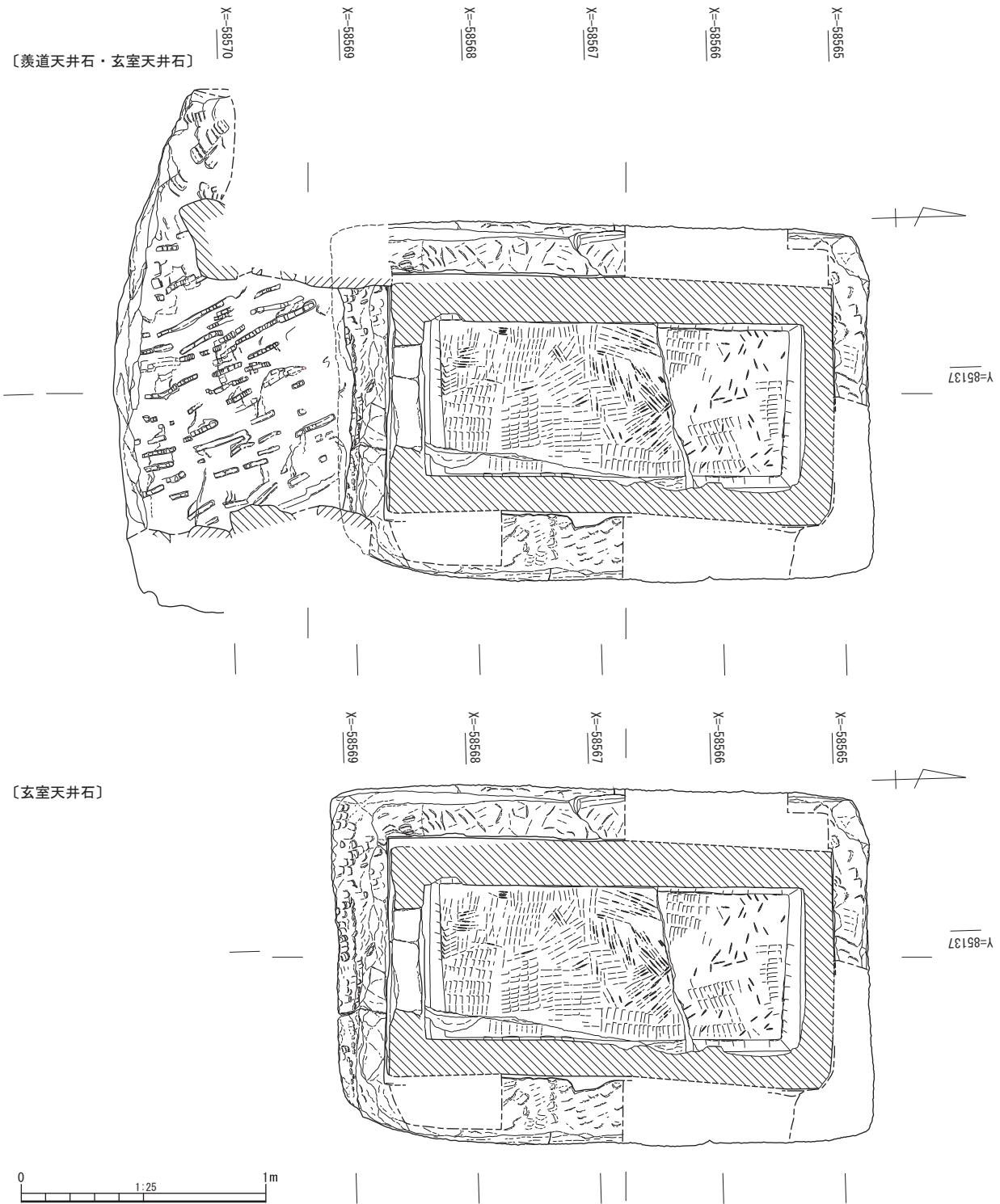
内面と同様に外面においても、各所で石材を加工した痕跡を観察できる。前壁側の南小口外面には、全体にいわゆるチョウナ削り技法による石材の加工痕がある。ただし、削り抜き玄門下部の一段深くなった削り込み部分の平坦面には、チョウナ敲打技法と思われる加工痕がみられる。

奥壁側の北小口外面は、上端が標高約24.45 m、底面が標高約23.4 mにある。上から40 cmほどの範囲が比較的平滑な表面状態である。工具痕の深く残る部分があり、チョウナ敲打技法によって大まかに平滑にしたあと、チョウナ削り技法によって平滑に仕上げたものとみられる。ただし、東側壁に近い部分は、表面の凹凸がほとんど目立たず、チョウナ削り技法による丁寧な仕上げをほどこす。その下、上から30～50 cm程度の範囲には、仕上げ加工があまりおよばない凹凸の顕著な部分があり、上から下へとチョウナ敲打技法により大まかに平滑にした状況を観察できる。さらに、上から50～80 cm程度の範囲は、表面が非常に平滑になるとともに、細かな面が連続的に形成される。チョウナ削り技法の丁寧な仕上げによるものであろう。そして、上から80～90 cmにあたる部分には、加工痕のみられない高まりが存在する。それより以下の20 cmほどは玄室形状が下すぼまりとなる部分であり、工具による加工痕が明瞭に確認されるいっぽうで表面の凹凸がきわめて著しい部分でもある。下から上へと敲打した状況を観察でき、その顕著な凹凸をなす表面状態から、仕上げ加工がほどこされていない粗割りの状態をとどめたものとする。玄室の外面に残る工具痕は、いずれも幅5 cm程度であり、刃部先端は緩やかな弧をもつ。外面の表面状態にみる加工痕のあり方は大きく4区分することができ、その差は表面の加工方法の違いにもとづくものとみられる。(岩本)

右側壁にあたる東側壁外面は、標高約24.4 m以下、23.45 m付近にある。外面の表面状態は大きく4区分できる。上から10 cmほどの範囲は非常に平滑な表面状態であり、丁寧に仕上げられる。上から10～30 cmほどの範囲については、その下の上から30～50 cmほどの範囲と工具痕の方向が異なるが、やや表面状態を平滑とするチョウナ敲打技法ののちにチョウナ削り技法によって仕上げたものとする。さらにその下、上から50 cm以下の範囲は表面の凹凸が顕著であり、粗く加工された状態である。チョウナ敲打技法の痕跡であろう。全体としては、上部はチョウナ敲打技法ののちにチョウナ削り技法によって仕上げる傾向が強く、下方はチョウナ敲打技法後のチョウナ削り技法による仕上げがあまくなる。

左側壁にあたる西側壁外面は、標高約24.3 m以下、23.4 m付近にある。外面の表面状態は大きく

4区分できる。上部の15 cm程度の範囲は、加工痕がほとんどみられないほど平滑な表面状態であり、きわめて丁寧な仕上げがなされる。ついで、その下30 cmほどの範囲は、平滑ながらもところどころに深く打ち込まれた工具痕が残る。石材の表面を粗く加工したのちに、仕上げをほどこしたものとみられる。その下、20 cm弱ほどの範囲は表面が平滑であり、仕上げ加工がほどこされる。そして、底面から上へ40 cmほどの範囲は、凹凸が目立つ表面状態であり、明瞭な仕上げの加工痕がみられない。全体的に外面の表面状態は、上部がチョウナ削り技法によって丁寧に加工され、底面近くではチョ

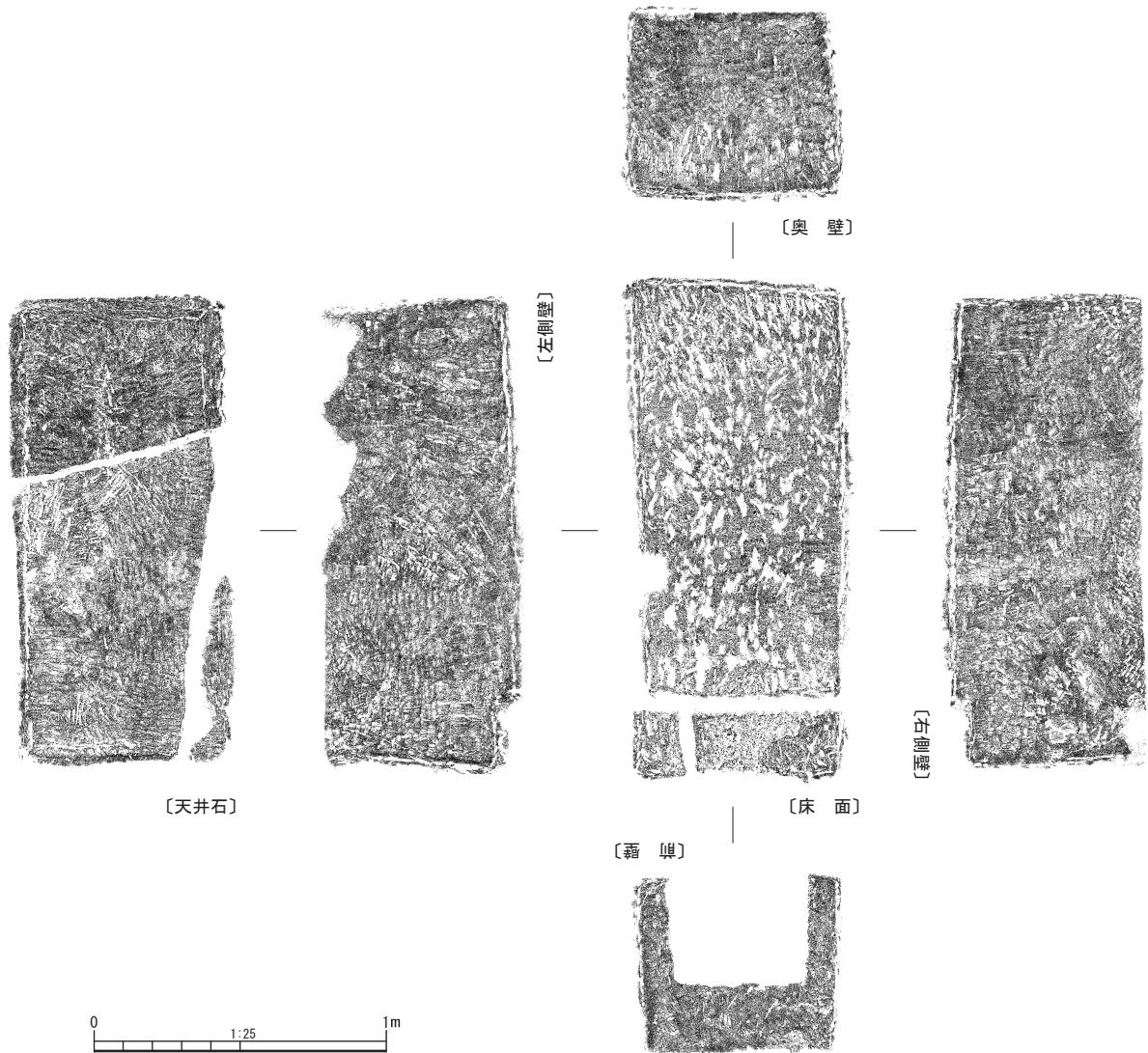


第20図 埋葬施設見上げ図〔玄室・羨道内面〕

ウナ敲打技法による加工が目立つ。外面中位では、チョウナ敲打技法ののちにチョウナ削り技法による仕上げがほどこされるが、場所ごとに様相が少しづつ異なる状況を観察できる。（藤井・岩本）

天井石 天井石の上面は、標高約 24.7 m で検出した。大小の違いはあるが、4 片に割れた状態で出土しており、南西側にある 2 片は西側に下がるように傾斜している。上面は全体に丸みを帯びており、天井石内面や棺身とは状態に差がある。石材が割れているために正確な数値ではないが、規模は長軸（南北長）約 2.2 m、短軸（東西幅）約 1.5 m、厚さ約 30 cm である。平面形態が長方形を呈する、扁平な一枚岩である。天井石の上面は平坦であり、側面の東側と西側さらに北側も平坦な形状をなす。いっぽう、南小口の下半部には抉りを入れて段差をつくる。この小口の抉りは、羨道天井石の位置する南側にのみ確認できることから、羨道天井石と組み合わせる設計にもとづく加工とみられる。

天井石の上面と側面には、遺存状態が悪いながらも部分的に石材を加工した痕跡が残る。その加工痕の幅は約 5 cm であり、チョウナによるものと推測される。天井石上面では、加工痕が深くにまで達するところが目立ち、チョウナ敲打技法によるものと考えられる。チョウナ削り技法の痕跡はみとめられない。天井石側面については四面ともに幅約 5 cm の工具痕があり、チョウナ敲打技法に加えてチョウナ削り技法によって平滑に加工する。大きく削り込みをほどこす南小口下半部については、幅約 2.5



第 21 図 埋葬施設拓影〔玄室内面〕

cmの工具による加工痕を明瞭に観察できる。

天井石は、棺身より南北でそれぞれ約20 cmずつ、東西でそれぞれ約25 cmずつ、ひとまわり大きな規模をもつ。また、天井石は棺身と組み合う際に、身の上端にのるだけではなく、覆い被さる特殊な構造をとる。天井石下面の棺身と接する部分に幅約15 cm、深さ約6～10 cmの割り込みを設けて、割り込みの内側に棺身上端が位置するように組み合わせる。すなわち、蓋は身を覆うための段差をもつという、通有の石棺とは異なる特徴を備える。(磯貝)

天井石内面の割り抜き部の大きさは、石材が割れているために正確な数値を提示しがたいものの、長さ1.47～1.53 m、幅69～71 cm、深さ3～5 cmである。上すばまりとなるように屋根形に割り込む。上部の大きさは、長さ1.38～1.44 m、幅58～64 cmである。天井石は棺身とは異なり、北側より南側の方が幅の広い長方形の平面形態である。内部の表面には全体に、石材の加工痕が目立ち、チョウナ敲打技法のちにチョウナ削り技法によって仕上げたものと考えられる。とくに、内面を屋根形に割り抜く際には、周囲からチョウナ敲打技法によって加工をほどこしたようであり、チョウナ削り技法に先行するチョウナ敲打技法の痕跡が深く残る。(岩本)

玄門閉塞石 羨道から凝灰岩の板石が一枚出土し、調査前に羨道で採集した破片がこれと接合した(第22図)。幅53 cm、長さ71 cm、厚さ11 cm、重量35.5 kgであり、平面形が長方形の扁平な板石である。玄門周囲の割り込みが幅約53 cm、高さ約80 cmと法量が近似する点から、玄門の閉塞石と考える。

もっとも大きな破片が羨道敷石上で破面を南にして出土しており、閉塞状態からそのまま南へ倒れたとすれば、出土時の上面が玄門に接していたこととなる(図版13)。玄門割り込みの範囲より閉塞石は10 cm弱短く、設置時に玄門上部に5 cmほど隙間が生ずるが、閉塞石の上部を欠損するため本来の状態は不明である。

出土時の上面にチョウナ敲打技法とチョウナ削り技法による幅約5 cmの加工痕が残る。下面はチョウナ削り技法によって平滑に仕上げられる。小口面と両側面にはチョウナ削り技法がみられる。(磯貝)

② 羨 道 (第18～21図、図版14・16・19・20・25)

側壁については、比較的良好に遺存する西側の左側壁の状況からみてゆきたい。その構築順序は、まず幅約1.3 m、高さ50 cm以上、厚さ20 cm程度の大ぶりの板状の石材を立てて、腰石とする。つぎに腰石の上部にはやや小ぶりの石材を積み上げ、最後に天井石を架構する。

羨道天井石の南面には、左側壁の腰石上部に積み上げられた壁体最上部の石材が接する。したがって、羨道の天井石は本来的に現状で確認できる一石のみであると判断され、この範囲を一つの空間として認識できる。この天井石の存在する範囲と壁体腰石の設置範囲はほぼ一致しており、この空間を羨道と認識することが可能である。羨門は両側壁の遺存状態が悪く、閉塞方法も不明である。

羨道の規模は、長さが右側壁付近で約1.1 m、左側壁付近で約1.3 mと不揃いとなるが、天井石の範囲を重視するとほぼ1.1 mとなる。幅は0.9～1.0 mほどである。壁体は垂直に近く立ち上がる。床面の標高は約23.3 mである。高さは90 cmに満たない。

壁体の構造を細かくみてゆくと、先の説明と重複するところもあるが、左側壁では幅約1.3 m、高さ50 cm以上、厚さ20 cm程度の大ぶりの板石を、右側壁では幅約1.15 m、高さ57 cm以上、厚さ20 cm程度の板石をそれぞれ腰石とする。腰石には、上辺を剥離して形状を整える部分が目立つ。また、左側壁の表面はおもに剥離によって整えるが、右側壁の表面にはチョウナ敲打技法によって加工した痕跡がみられ、ほかの羨道の石材とは様相を異にする。

壁体の上部には、腰石に比べて小ぶりがつき大きさにばらつきのある石材を、おもに小口積みする。

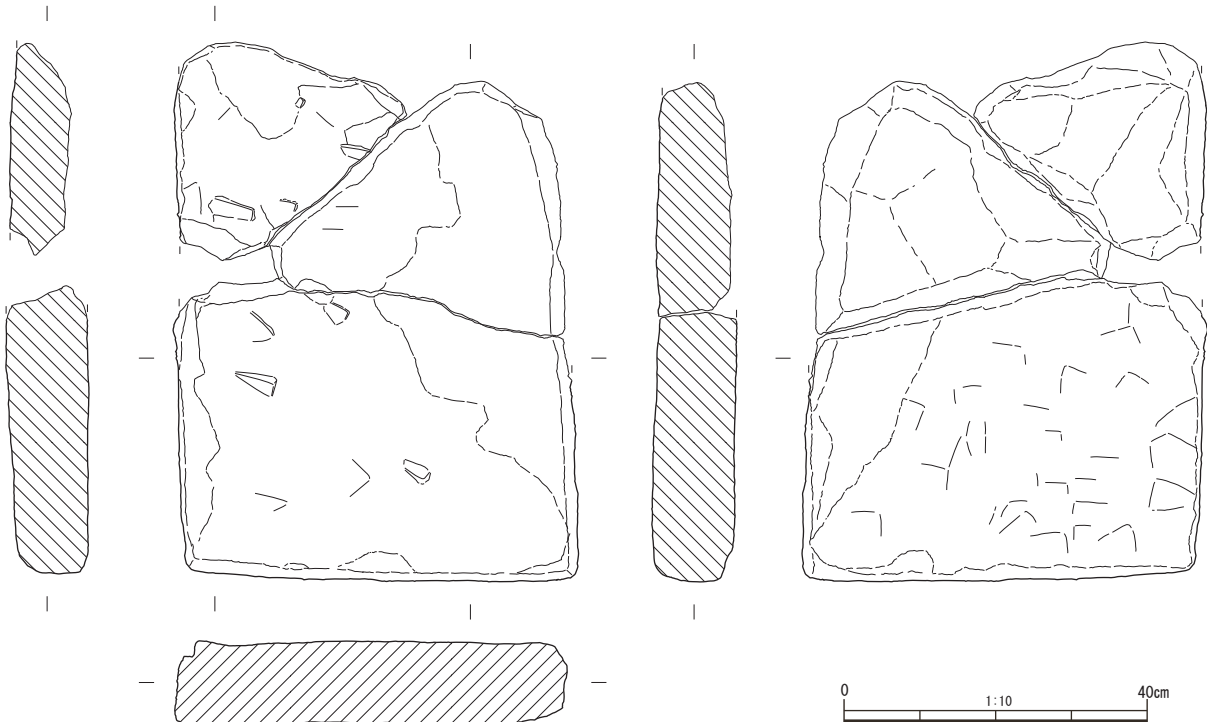
主体となる石材は、幅 40～50 cm 程度、厚さ 10 cm 程度のものであり、石材間に詰めた拳大程度の石材があれば、幅 70 cm に達するような石材も確認できる。必要に応じて、得られた石材を柔軟に利用しつつ、壁体を構築していったのであろう。なお、壁体の上部の石材にも、少なからず表面を加工した痕跡をみとめうる。工具による加工痕や意図的な剥離を観察できる石材もある。なお、壁体構造は前庭部との境界に相当する部分の遺存状態が悪く、とくに腰石の状況は不明であるが、少なくとも上部については前庭部まで連続する。この壁体上部の状況から、羨道の入口に相当する構造は備わらなかったものとみる。上部に積み上げられた石材の段数は、左側壁で3ないし4段、右側壁で2ないし3段と差があり、左側壁の段数が多い。この相違については使用した石材、とくに腰石の大きさが右側壁のものがより大きいという点に関連している可能性がある。

こうした壁体の段数の相違からは、羨道の構築に際しての計画性が総体としてやや低いものであったことを示唆する。石材の加工において現物合わせのような方法で対応していた可能性が高い点は、玄室の状況とは異なっており、当古墳の築造のあり方を考えるうえで示唆的である。(岩本)

天井石は確認できる範囲で幅約 2.2 m、奥行約 1.0 m、厚さ約 20 cm に達する大型の板石である。天井石の上面は標高約 24.4 m である。天井石上面には加工にとまなう剥離痕と工具痕、下面となる羨道内面側にも明瞭に工具痕が残る。

天井石上面の加工痕には、幅約 1.5 cm と幅約 3.5 cm のものがある。幅約 1.5 cm の加工痕は溝状をなし、おおむね 1～2 cm ごとに階段状の痕跡を呈し、石材にたいして深く入り込む。加工痕の長さは 10～15 cm におよぶ。いっぽうで幅約 3.5 cm の痕跡は加工が浅い。少なくとも 2 種類以上の幅の異なる工具を用いて表面を整えた可能性がある。

天井石の下面の中央部付近に、石材の軸にたいしてやや斜交した、幅 1.5 cm 程度の溝状を呈する同一方向にほどこされた複数の加工痕がある。加工痕には長さが 10～15 cm におよぶものもあり、1～2 cm 程度ごとに階段状の段差をもつような痕跡をとどめる。長い加工痕には、複数回の累積かもしれないが、長さ 30 cm 程度に達するものもある。壁体に接する範囲の付近には、幅 3.5 cm ほどの工具痕



第 22 図 玄門閉塞石

も残る。

天井石側面については、南北側面に工具痕がみとめられる。工具幅は不明である。(磯貝)

羨道と玄室との関係性については、埋没する部分が多く不明な点もあるが、玄室を羨道が挟み込むというよりは、玄室の外面と羨道壁体の内面とがほぼ揃う構造である。左側壁では部分的に腰石が玄室の位置にまでおよぶがごく一部分であり、とりわけ腰石の上部を構成する壁体の石材は玄室の位置にまでは達していない。いっぽう、右側壁の腰石は玄室の手前部分に接するように位置する。壁体上部の石材は小ぶりであり、玄室部分にまで達するようにもみえるが、それほど大きく入り込むわけではない。羨道の石材は壁体と天井石ともに安山岩であり、近隣で産出する石材が使用される。

なお、床面から玄室南小口に接して、幅が 65 cm 弱、奥行 55 cm 程度、厚さ 10 cm 前後の表面の平滑な凝灰岩の板石が出土した。板石の周囲には、安山岩の長径 5 cm 程度の角礫や長径 20 ~ 30 cm 程度の円礫が出土している。これらは羨道の床面を構成した石材と考えられ、玄門付近の床面中央には凝灰岩の板石を敷石とし、その左右と手前に礫敷をほどこした可能性が想定される。なお、敷石の上からは凝灰岩の板石がもう一石出土した。石材の幅が約 50 cm、長さ約 30 ~ 40 cm 以上、厚さ 10 cm 程度である。上述したように、玄門閉塞石である可能性が高い。

羨道の埋土については、そのすべてをふるいがけした。土器の細片を確認したが、床面上において原位置を保つような状況で出土した遺物は存在しない。(岩本)

③ 前庭部 (第 16 ~ 19 図、図版 19)

羨道の南側には、壁体が羨道から連続する天井石のない空間が広がる。壁体は、羨道と同じく幅約 90 cm、高さ約 65 cm、厚さ約 20 cm の大ぶりの板状石材を立てて腰石とし、その上に幅約 15 ~ 20 cm、高さ約 15 cm である小ぶりの石材をおもに小口積みする。西側壁体の腰石上の石材は、4 ないし 5 段にわたり羨道天井石上面の標高約 24.3 m まで積み上げられ、現状では羨道から南へ約 1.8 m と続く。羨道壁体の腰石に接する前庭部壁体の腰石が大きく移動しており、その上部に積み上げられた石材も全体に下方へずり落ちた状況となっている。壁体の石材は、すべて安山岩である。なお、調査中に第 1 トレンチ北壁から南へ約 2.8 m、西壁から東へ 0.3 m 地点周辺で検出した石材 (第 16 図 D-D' 断面の石材) を流土中にあると判断して除去したが、盛土中に設置されていた可能性がきわめて高い。大きさや石材は西側壁と同様である。羨道から前庭部へと続く壁体との連続性が考えられることから、除去した石材は西側壁の一部となろう。その場合、前庭部の壁体の平面形態は「八」の字状に南へと広がり、羨道から南へ約 2.9 m 続くと想定できる。東側壁は第 1 トレンチ北東部に広がる攪乱坑の範囲内に位置することから、後世にもち去られたと考える。

前庭部の床面は、羨道と同じく盛土によって構築される。攪乱のため不整形なところがあるが、平坦面をもたずに墳丘裾へと続く。床面は埋葬施設の設置面と一連の土層をなすことから、埋葬施設構築時に形成されたと考える。前庭部でも羨道に近いところから長径約 20 cm の円礫が出土したが、床面より浮いた状態であったため、前庭部にも羨道と同様の礫敷が存在したかは不明である。

床面直上からは、調査区東壁から西へ約 1.3 m、北壁から南へ約 2.0 m の位置で、完形に近い土器が出土した (第 17 図)。前庭部の周辺ではほかにもいくつか土器が出土した点については上述したが、この完形に近い土器は床面との間に堆積土をはさまないことから、原位置を保つ可能性がきわめて高い。古墳が継続使用、再利用された年代や前庭部の利用方法を考えるうえで示唆的である。

現状を考慮すれば、本来の床面は明瞭な平坦面を形成せずに、墳丘裾へと緩やかに傾斜して下降してゆくものと考えられる。はっきりとした傾斜変換を確認できないため、床面から前庭部の範囲を把

握することは困難である。したがって、前庭部の規模は、壁体の残存する範囲と墳丘規模から、東西幅約 1.0 m、南北長約 2.9 m の空間となるであろう。(鈴木)

(4) 埋葬施設の構造 (第 14・15・23 図、図版 21・22)

旧地形の整地から墳丘の完成に至るまでの過程における埋葬施設の構築状況を把握するため、第 5・6 トレンチの主要観察面(北壁)に沿って設定したサブトレンチを墳頂トレンチまで延長して調査を実施した。第 5 トレンチで設定したサブトレンチが玄室西側の SW 区サブトレンチ、第 6 トレンチのサブトレンチが玄室東側の SE 区第 1 サブトレンチである。さらに、埋葬施設の縦断面にあわせて、玄室北側に NE 区拡張サブトレンチを設定した。また、SE 区では羨道から玄室に併行して SE 区第 2 サブトレンチを設定し、羨道と玄室の構築にかかわる土層の関係を追究した。

以下では、NE 区拡張サブトレンチと SE 区第 2 サブトレンチの調査所見についてのみ言及する。第 5 トレンチと連続する玄室西側 SW 区サブトレンチと、第 6 トレンチと連続する玄室東側 SE 区第 1 サブトレンチについては、第 5・6 トレンチの報告を参照されたい(第 3 節第 2・3 項)。

NE 区拡張サブトレンチ 玄室北側の土層堆積と玄室北側外面の状況を確認するために設定したサブトレンチである。サブトレンチの規模は、南北幅約 70 cm、東西長約 1.3 m である。

玄室天井石下端となる標高 24.5 m より下層は、黄橙色系・褐色系・灰色系のシルト層がおおむね 5～15 cm 程度の厚みをもって水平に互層状に堆積する(西壁 11～30 層、南壁 1～13 層)。細かな単位で盛土がほどこされており、玄室天井石を架構するための基盤とした可能性が高い。

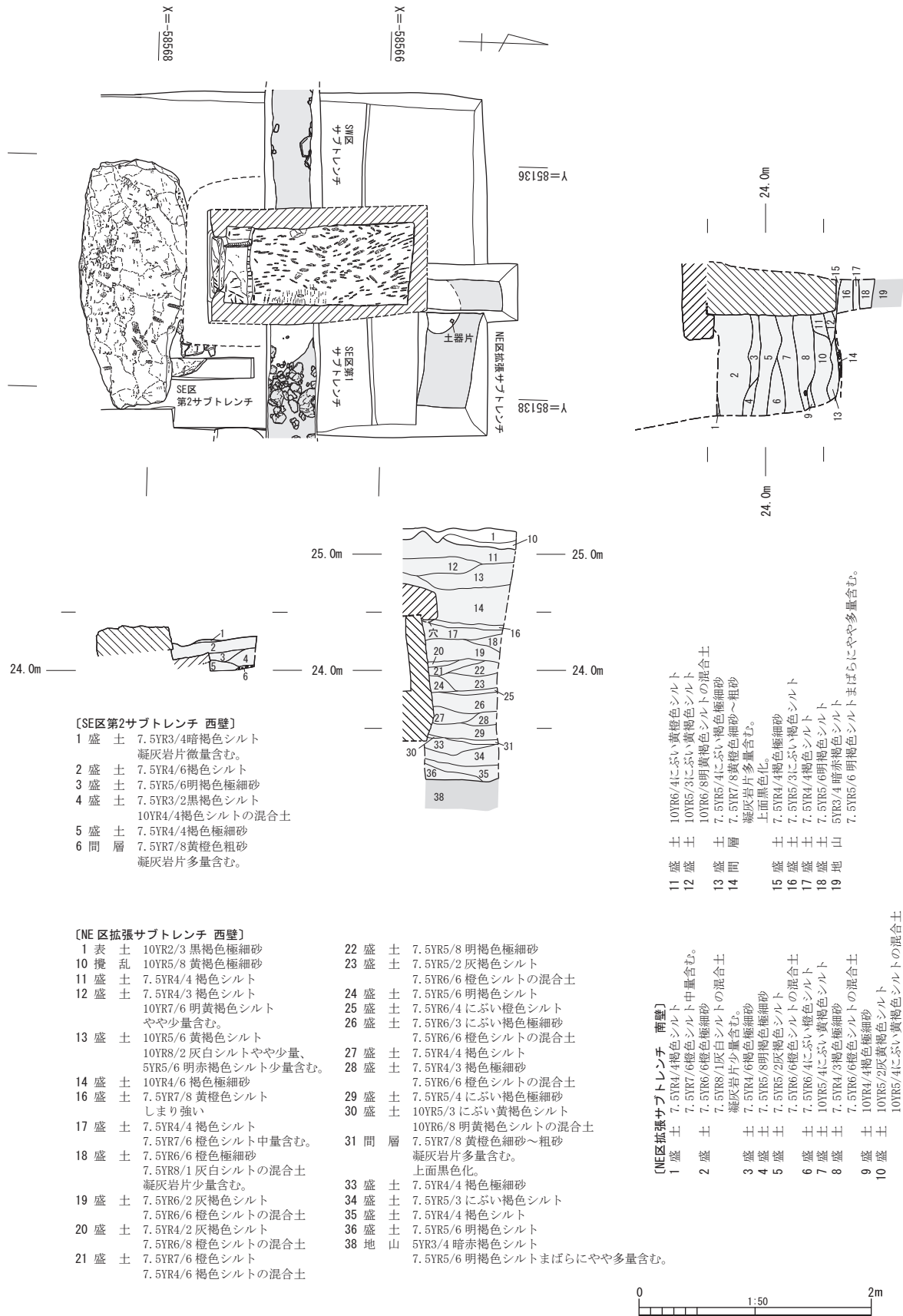
標高 23.4 m 付近には、玄室石材と同じ凝灰岩を含む厚さ 5 cm に満たない黄橙色細砂層が堆積する(西壁 31 層、南壁 14 層)。この黄橙色細砂層は、ほぼ同じ高さにおいて NE 区サブトレンチ全体に面的に広がる。これに対応する土層は、ほかのサブトレンチでも確認できる(第 5 トレンチ北壁 33 層・第 6 トレンチ北壁 55 層)。玄室周辺に堆積する間層と考えるが、NE 区拡張サブトレンチでは玄室の加工に由来する凝灰岩の出土量がほかと比べて少なく、場所によって堆積にばらつきがある。この土層の下面すなわち褐色極細砂(西壁 33 層、南壁 15 層)が、玄室基底面と高さをほぼ同じくすることから、玄室設置面に相当すると考える。一部、玄室にこの褐色極細砂が覆うように堆積するが、玄室が自重によって沈み込んだのであろう。玄室基底面以下のおよそ 30 cm にわたっては、互層に黄橙色系と褐色系のシルト層で水平に盛土をほどこす(西壁 34～36 層、南壁 16～18 層)。玄室を設置する基盤は、地山上面ではなく細かく互層をなす盛土によって形成される。地山はその下標高 23.0 m 付近で水平に近い状態で確認されている(西壁 38 層、南壁 19 層)。旧表土はみられず、削り出されたと判断できる。

なお、玄室となる棺身に相当する部分は、高さ 1.1 m、幅 45 cm ほどの範囲を確認している。(岩本)

SE 区第 2 サブトレンチ 羨道と玄室の構築過程にかかわる土層を把握するために設定したサブトレンチである。サブトレンチの規模は東西幅約 20 cm、南北長さ約 70 cm であり、玄室東側から羨道天井石ならびに羨道壁体におよぶ範囲の土層堆積状況を確認した。

土層は第 6 トレンチと対応し、黄橙色系・褐色系のシルト層がおおむね 8～15 cm 程度の厚さで水平に互層状に堆積する(西壁 1～5 層)。玄室東側の盛土は羨道東側の裏込めと一体をなし、玄室周囲の盛土が羨道の構築と同時になされた点を確認できる。さらに、羨道天井石を被覆する土層は玄室天井石の下位にあるため、羨道天井石の架構後に玄室天井石が設置されたことも明らかである。

土層の堆積状況から、玄室の設置→盛土をほどこしながら羨道壁体の構築→羨道天井石の架構→玄室天井石の設置という一連の過程を復元できる。(岩本)



第23図 埋葬施設断ち割り部平面図・壁面図〔NE区拡張サブトレンチ・SE区第2サブトレンチ〕

5 墳丘構造と墳丘形態の復元

(1) 墳丘築造の諸段階と構造

① 構築の諸段階 (第24図)

墳丘に設定した東西方向の断ち割り部分の土層断面をもとに、墳丘築造の諸段階を整理する。墳丘の築造は埋葬施設の構築とともに一体的に進行し、おおよそ8段階にわたる工程に復元できる。

第1段階 選地 墳丘の築造は、墓域の選定にはじまる。廻原1号墳では丘陵の浅い谷地形が選択される。墳丘の下層からは溝などの遺構が検出されており、選地された場所は古墳築造に先立って別の土地利用がなされていたことを確認できる。

第2段階 基盤造成 つぎに、基盤を造成するための整地をおこなう。本来の地形の高い部分を削り出し、低い部分には盛土をほどこす。とくに、高さの低い墳丘南側は盛土によって整地しており、そのほかの大部分は削平によって整地する。墳丘の南側には旧表土を残す部分があるため、基盤造成のための削平による整地は必要最小限にとどまるものであったと考える。

第3段階 一次墳丘構築 基盤造成のあとは、玄室を設置するための一次墳丘を盛土によって構築する。全体に水平になる高さまで盛土をほどこし、上面を整える。その高さは、墳丘高所にあたる東側から北側の墳丘裾となる地山の標高よりわずかに高い(第1表)。こうしたことから、地山上にあえて高く盛土をほどこすのは、玄室の搬入・設置のための水平面の確保に加えて、谷地形につきまとう排水などを考慮したものと推定する。

第4段階 玄室設置・加工 構築した一次墳丘面上に、玄室が設置される。その作業面には、玄室に由来する加工石材片が周囲に堆積し、間層を形成する。石材片には工具による加工痕をとどめるものがあり、現地で玄室の加工をおこなったことを示す。

第5段階 羨道壁体構築 玄室の設置後に、順次、壁体を構築しながら墳丘を築造する。埋葬施設の周囲は全体にほかより盛土の単位が細かく、羨道壁体の構築と墳丘築造が一体的に進行しながらも工法を異にする。玄室に由来する加工石材片からなる間層が部分的にみられる。

第6段階 羨道天井石設置 羨道壁体の構築ののち、玄室天井石に先行して羨道天井石が設置される。羨道の搬入と設置にあたっては、第5段階で構築した盛土による水平面を用いたと考える。

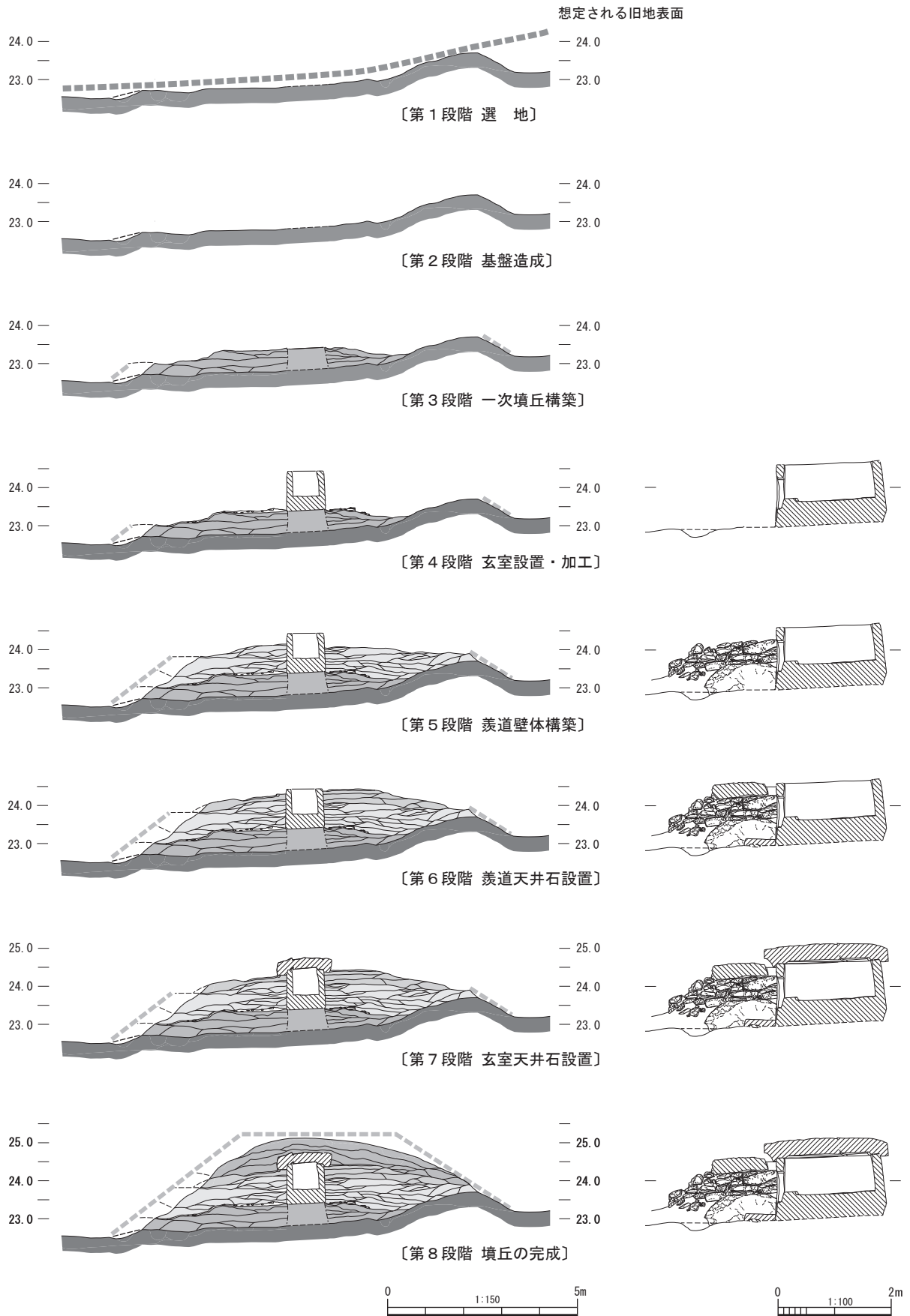
第7段階 玄室天井石設置 玄室棺身の上端近くまで、薄く水平な盛土を広範囲にほどこして、玄室天井石を搬入・設置するための作業面を形成する。作業面の最上層には、固くしまった土層がやや広範囲にごく薄く堆積する。

第8段階 墳丘の完成 玄室天井石を設置したあとは、それまでの盛土とは異なって、広範囲におよぶ厚い単位の盛土によって、埋葬施設の上部を覆うようにして墳丘を完成させる。

② 盛土施工にみる諸段階の特徴と墳丘構造 (第24・25図)

上記の墳丘築造の諸段階の状況とそれぞれの段階の違いをより具体的に説明するため、盛土施工にみる諸段階の工法について特徴を整理する。墳丘築造過程において盛土をほどこすのは、第2段階、第3段階、第5段階、第7段階、第8段階の合計5工程である。

第2段階 整地を目的とした盛土は、墳丘南側においてのみ確認できる(第1・2トレンチ)。地形的に低地にあたるこの範囲には旧表土が完全に削平されずに、削り残された旧表土と削平された地山の上面に盛土がみられる。盛土はおおむね平坦に広範囲にほどこす。



第24図 墳丘構築の諸段階

第3段階 一次墳丘構築のための盛土は、まず最下層におおよそ丘陵の高い方から低い方へとやや小さな単位の盛土をほどこして平坦面を形成し、その後広範囲におよぶ水平の盛土を複数重ねる。一次墳丘は玄室を設置する目的から、その上面を水平とする指向性が強くうかがわれる。

第5段階 埋葬施設の周辺は、東西とも下部に細かな盛土の単位がある。上部も下部ほどではないが埋葬施設に近接して細かな盛土の単位が構成される。盛土の細かな単位は、羨道の壁体構築にともなう可能性が高い。いっぽう東側に顕著であるが、墳丘の端に近い部分には土手状の高まりをなす盛土がある。墳丘中心付近の細かな盛土とのあいだには、やや大きめの単位で水平に盛土をする。玄室周辺の細かな単位の盛土と、水平かつ広範囲におよぶ盛土を反復する。

第7段階 玄室天井石の搬入と設置のための作業面を形成する目的から、とくに薄く水平方向に盛土を広くほどこす。盛土の範囲の周縁部分は土手状の高まりを形成し、その内側は盛土を充填する。盛土の端の位置は、第5段階の端までは到達しない。

第8段階 それまでにほどこした盛土の範囲全体を覆うように最終的に盛土をおこなう。とくに、埋葬施設の上部を覆うように広範囲に厚く盛土がなされる。墳丘の端にあたる部分は盛土の単位が細かく、土手状の高まりを形成する。

盛土の工法にみる特徴 全体的な盛土の傾向としては、水平方向に平坦面を形成することを目的とした工法として、厚く広い単位を指向する。他方、埋葬施設の構築にかかわる範囲や段階においては、盛土の単位は薄く細くなる傾向がある。

第3・5・7・8段階においては、盛土範囲の周縁に小さな土手状の高まりを形成して、その内側を充填する工法をとる。盛土をする際に墳丘の外側はどうしても内側より低くなるため、作業効率の低下と墳丘流失を引き起こす遠因ともなりかねない。そうした工法上の問題点の克服から、盛土範囲の周縁に土手状の高まりを設けて、その内側に盛土を充填するという工法を反復する。

なお、墳丘西側については、土手状盛土がみとめられない。したがって、墳丘西側斜面については、後世に二次的な削平などの改変を想定できよう。(岩本)

(2) 墳丘形態と墳丘規模の復元(第25図)

発掘調査の結果、廻原1号墳の墳丘には外護列石や葺石といった外表施設のないことが判明した。また、旧地形を削り出したうえで、墳丘の大部分を盛土によって構築することを確認した。したがって、墳丘裾の位置は、墳丘斜面を下りきった地形の傾斜変換に求めることとなる。ただし、廻原1号墳の場合、先述したようにその立地から墳丘の各所で裾に相当する位置の構築方法が異なるため、墳丘復元にあたっては注意を要するところがある。

墳丘基盤造成の様相 古墳周辺の旧地形は谷地形であるため、墳丘の基盤には場所による違いがあり、墳丘裾付近の状況にも差異がある。

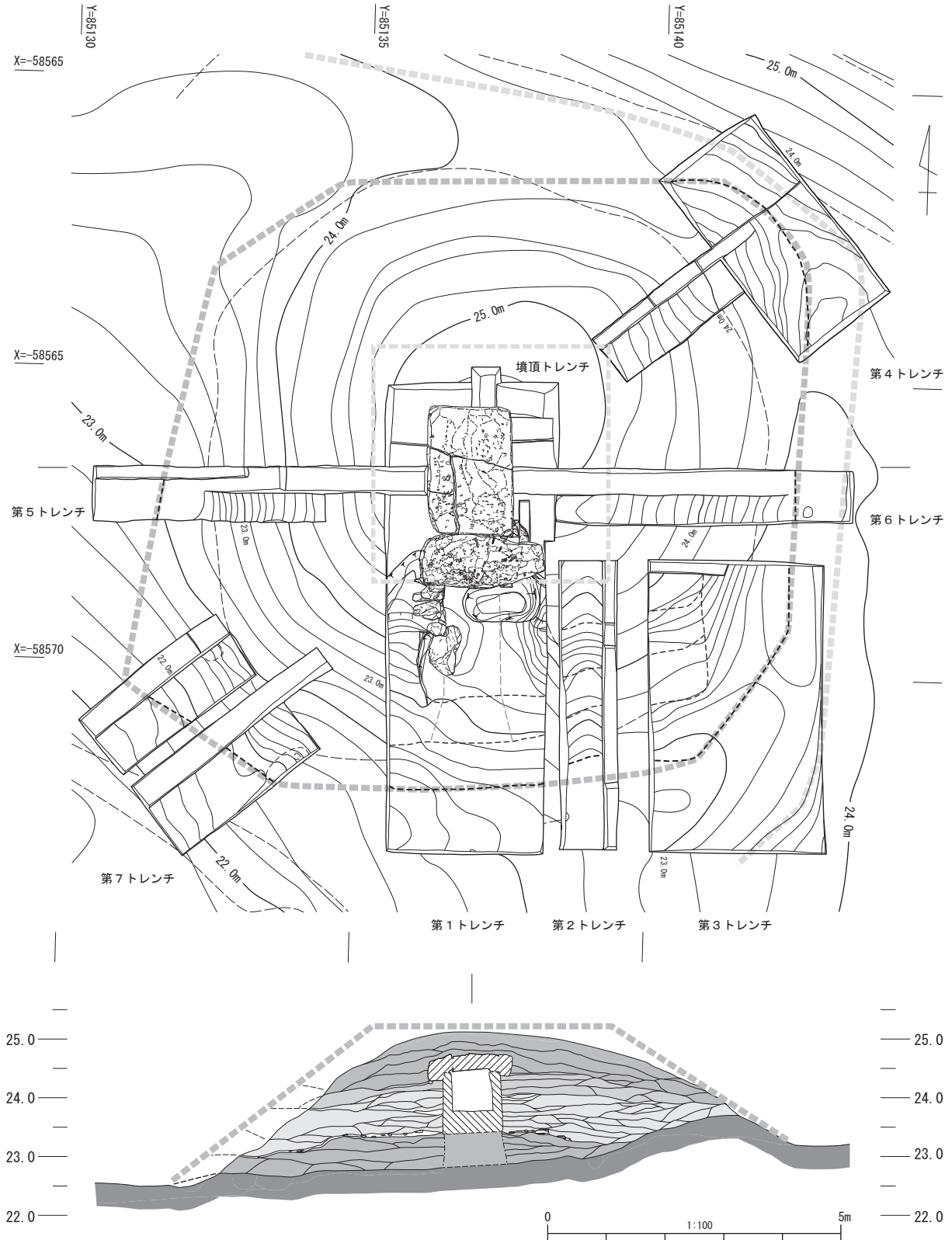
丘陵の上部に近い墳丘の北東側(第4トレンチ)から、東側(第6トレンチ)、さらに南東側(第3トレンチ)にかけては地山を大きく削り出して墳丘の基盤を造成するため、地山に傾斜変換がみられる。丘陵の下方に位置する墳丘西側(第5トレンチ)も、地山を削り出すことで基盤を造成しており、地山に傾斜変換がある。こうした状況にたいし、墳丘の南側が標高を著しく低くしはじめる部分(第1・2トレンチ)では旧表土が一部削平されておらず、その上にほどこされた盛土に傾斜変換がある。墳丘南西側(第7トレンチ)では、西半は地山の傾斜変換、東半は盛土にともなう傾斜変換があり、墳丘裾の様相は複雑な状況となっている。

墳丘復元の方法 墳丘の各所に設定したトレンチでは、地山の削り出さないし盛土にともなう傾斜

第1表 廻原1号墳における墳丘各所の標高

トレンチ名	第7トレンチ	第5トレンチ	第1トレンチ	第2トレンチ	墳頂トレンチ	第3トレンチ	第6トレンチ	第4トレンチ
女室基底標高	—	23.4	23.4	—	23.4	—	23.4	—
墳丘裾標高	21.8・21.9・22.0	22.4～22.5	22.4～22.7	22.4・22.3	23.0 (地山面)	23.1・23.2	23.2	23.3

単位：m



第25図 廻原1号墳の墳丘復元案

変換を確認した。これらの傾斜変換は、墳丘裾の位置をある程度反映したものとする。ただし、その位置はあくまでも現状であり、本来の墳丘裾の位置を復元するには、さらに各所の残存状況を考慮する必要がある（第25図・第1表）。

墳丘復元にあたっての第一の定点となるのは、残存状況の良好な墳丘東側である（第4・6・3トレンチ）。墳丘断面のとくに下半部が一定の傾斜を保つとともに、異なるトレンチ間における傾斜変換の平面的な位置関係とその標高が整合しており、現状の傾斜変換が本来の墳丘形態をおおむね反映するものと判断できる。そして、墳丘東側において確認できるのが、南北に長い一辺の両端が鈍角に屈曲して、短辺へと連続する特異な平面形態を呈する点である。

つぎに、墳丘裾付近の状況を比較的良好に把握しえたのは、墳丘西側である（第5トレンチ）。南北方向への幅1mという狭いトレンチではあるが、墳丘の南北主軸にやや斜行して、標高の低い南側が西側へと広がる形状を示す。ただし、墳丘裾より上部の大部分は、前項で述べたように盛土の単位の状況から、遺存状態が良好ではないと推測される。したがって、現状は南北辺が墳丘南北主軸にたいしてわずかに斜交するが、本来はもう少し平行する形状であった可能性もある。

いっぽう、平面的な検出が困難であった墳丘南西側については（第7トレンチ）、トレンチの各所に設定したサブトレンチの断面によって墳丘裾の位置を確認した。墳丘を平面的に把握することは十分にできなかったが、4ヶ所の断面で確認した傾斜変換の位置を平面的におさえるとその位置関係は整合する。標高もおおよそ丘陵の地形の傾斜と矛盾しない。したがって、これらの断面にある傾斜変換はほぼ本来の墳丘裾の位置を反映していると判断できる。その場合、墳丘南西側で確認した墳丘裾は、墳丘西側で確認した南北辺にたいし鈍角に交わる直線的な形態を呈する。墳丘がおおよそ東西で対称をなすならば、墳丘東側で確認した長辺の両端にみられる短辺に相当するであろう。

残存する墳丘面の等高線が大きく抉られた形状となる墳丘南側については、墳丘裾の位置をほぼ把握できた南東側と南西側の地形をもとに、東西に直線的な墳丘形態をなすものと考えた場合、現状の裾の位置にはやや不整合が生じる。とくに埋葬施設の前面は、想定よりも外側に傾斜の変換がある。墳丘南側の埋葬施設前面以外の部分が、後世の削平によって現状の傾斜変換が本来の墳丘の内側に位置することとなったとする解釈も成り立つが、もっとも改変を受けやすい埋葬施設前面がより本来に近い形態をとどめ、ほかの部分が改変されたとみるのは無理であろう。むしろ、墳丘裾は全体に現状よりもさらに外側に位置した可能性すら考慮できる。そこで、現状の傾斜変換をできるだけ積極的に評価し、墳丘南側の埋葬施設前面は墳丘の傾斜が緩やかとなる点をふまえて、そのほかの部分より墳丘裾が外方にふくらむような形状となる可能性を考えておきたい。

墳丘北西側から北側にかけては、発掘調査を実施していないため、墳丘復元にあたっての定点がない。そのほかの地点の発掘調査成果を勘案すると、北西部分は短い辺をなし、そこから鈍角に屈曲して北側は東西に長い直線的な形態をなすものと推測される。こうした推測は、墳丘測量図にみる状況とも矛盾しない。墳丘は大まかながら東西で対称に近い形態をなすものと考えられよう。

墳丘平面形態と規模の復元 ここまでの検討によって、廻原1号墳の墳丘平面形態は、おおよそ東西南北の四辺が長い直線的な形状をなし、四隅に短辺がとりつく、隅切方形あるいは変形八角形に近い形状に復元される。平面規模については、南北約10m、東西10～11m程度となる。

ただし、正八角形にみる規格的な墳丘とは異なって、南側へと墳丘が裾広がりとなるなど全体にいびつである。また、墳丘を構成する各辺も厳密には直線ではなく、わずかに湾曲する。全体として墳丘の規格性は乏しく、地形の制約が墳丘形態に与えた影響の大きいことが想定される。墳丘の北側から東側にかけては、墳丘に沿って掘割状の溝がめぐるが、その形態も不整形である。

北東—南西方向に長く、北西—南東方向に短いという墳丘の歪みは、墳丘の基盤となる地形が北東に高く、かつ南西に低いながらも、その高低差を解消する処置をほどこさないために生じたとみてよいだろう（第1表）。もともとの地形が低くなり始める南側には、その変化を解消するために盛土をほどこすが、その範囲はあまり広くにおよばず、埋葬施設前面にあたる墳丘南側のごく限られた部分に限定される。結果として、10 mほどの墳丘規模であるにもかかわらず、墳丘裾の高低差はおよそ1.5 mと著しい。

以上の特徴は、廻原1号墳の墳丘が規格性としては低いものであることを示唆しており、外表施設がともなわない構造である点とも整合する。したがって、墳丘平面形態については、地形による制約を受けた隅切方墳であるとみておきたい。

墳丘高の復元 墳丘高については、墳丘が対称形を指向するという前提のもと、比較的良好に遺存する東側斜面（第6トレンチ）下半部の傾斜を定点として、想定される墳丘の残存状況を考慮し、各所の墳丘斜面の傾斜角度ができるだけ等しくなるように調整して復元した。全体的なバランスも考慮し、墳丘西側が裾から約2.7 m、東側は裾が約2 mという墳丘高に復元する案を参考までに提示しておく。その場合、墳頂平坦面は一辺4 m弱の広さとなる。

なお、墳丘南西側の斜面にテラス状の緩斜面が存在し（第3トレンチ）、これが墳丘前面の南側にめぐる可能性も想定されるが、そのほかの地点において対応する緩斜面などは確認されていない。したがって、全体的な様相をふまえて、墳丘斜面に段築は備わらないと判断する。（岩本）

6 出土遺物

(1) 概要

廻原1号墳では各トレンチから土器を中心とした遺物が出土した。出土した遺物は古墳築造以前のものと古墳築造以後のものに大別できる。古墳の築造時期を直接示す遺物は確認できなかった。

墳丘の広範囲から須恵器、土師器、土製品が、盛土間層からは玄室製作にかかわると想定される石材加工剥片がまとまって出土した。

確認した遺物の種類と数を第2表に記す。なお、須恵器の甕については、破片が多数出土したが、遺存状態が悪く個体数の把握が困難であるため表に含めていない。（磯貝）

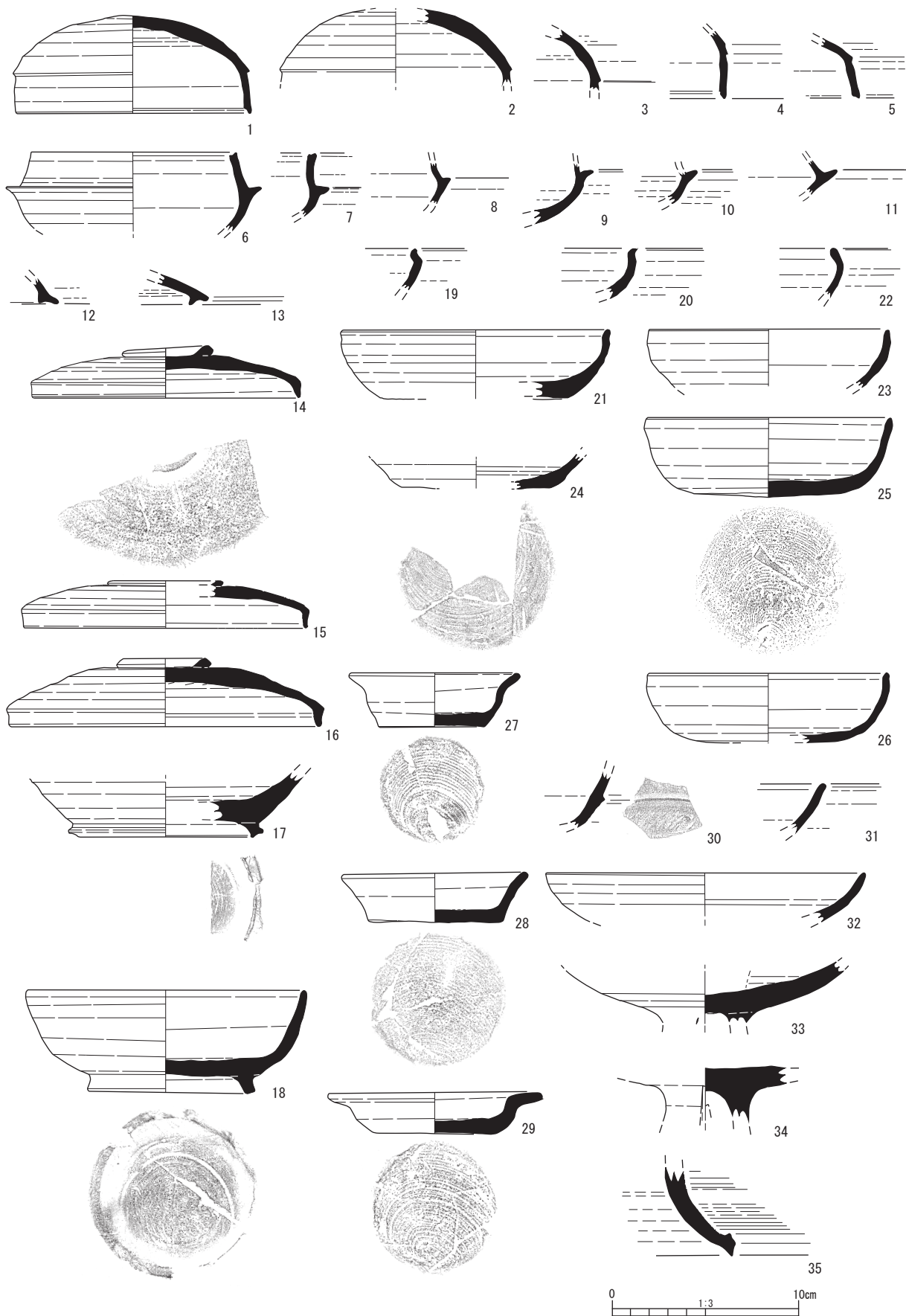
第2表 遺物の種類と数

須恵器		土師器		
器種	個体数	器種	個体数	
坏	坏H	11(6)	坏	1
	坏G	1		
	坏A	(8)		
	坏B	6(2)		
高坏	6	高坏	2	
壺	5	壺	2	
土製品		器台	1	
種類	数量	甕	1	
移動式竈	1	甗	1	
土製支脚	1	皿	2	
土器片錘	1	〔凡例〕()内は身の内訳		

(2) 須恵器（第26・27図、図版26・27）

確認できる器種には、蓋坏、坏、高坏、壺瓶類、甕などがある。甕以外の器種で把握した個体数は37点である。図化できる須恵器は少なく、全体としては破片が多い。

1～5は坏Hの坏蓋である。1は口径12.5 cm、器高5.2 cm、天井部径12.6 cmである。1～3は小さいながらも鋭く突出した稜が天井部と体部を画し、天井部外面上部に回転ヘラケズリをほどこす。口縁端部を凹ませたのち、ヨコナデによりつまみ出す。4は肩部外面の稜の突出がやや弱く、口縁端部のヨコナデもあまい。5は肩部の稜の突出がにぶく段状となり、口縁端部の面に沈線状の凹みをめぐらす。1～4は、口縁部の立ち上がりが直立し、5はやや傾斜する。3は第5トレンチ墳丘下層遺構、



第26図 須恵器(1)

4は墳頂トレンチSE区盛土から出土し、1は第1トレンチ流土と第3トレンチ流土の破片、2は第1トレンチ流土と墳丘直上の破片、5は第3トレンチ流土と第1トレンチ攪乱坑の破片が接合した。

6～11は坏Hの坏身である。6・7は水平の受け部に、ほぼ直立する口縁部の端部が面をもちつつ浅く凹む。6は受け部径13.6cmに復元される。8・9は受け部が矮小化し、口縁部がやや内傾する。10・11は口縁部の内傾が著しく、受け部が斜め上方にのびる。7・8は第1トレンチ攪乱坑、9・10は第6トレンチ盛土、11は第3トレンチ表土から出土した。6は墳頂トレンチ盛土と第1トレンチ盛土の破片が接合した。

12は坏Gの坏蓋である。口縁部内側に短い身受けのかえりをもつ。第3トレンチ流土から出土した。

13～16は坏Bの坏蓋である。13は口縁部内側にやや内傾する短い身受けのかえりをもつ。14は口径14.2cm、器高2.8cm、15は口径15.0cm、器高2.5cm、16は口径16.5cm、器高3.7cmである。14～16は口縁端部が直立し、直角に近い屈曲をもって天井部に至る。天井部外面に回転ヘラケズリをほどこし、頂部に輪状つまみをもつ。また、15は外面に「×」のヘラ記号がある。13は第7トレンチ表土、14・15は第1トレンチ墳丘面直上、16は第3トレンチ墳丘面直上から出土した。

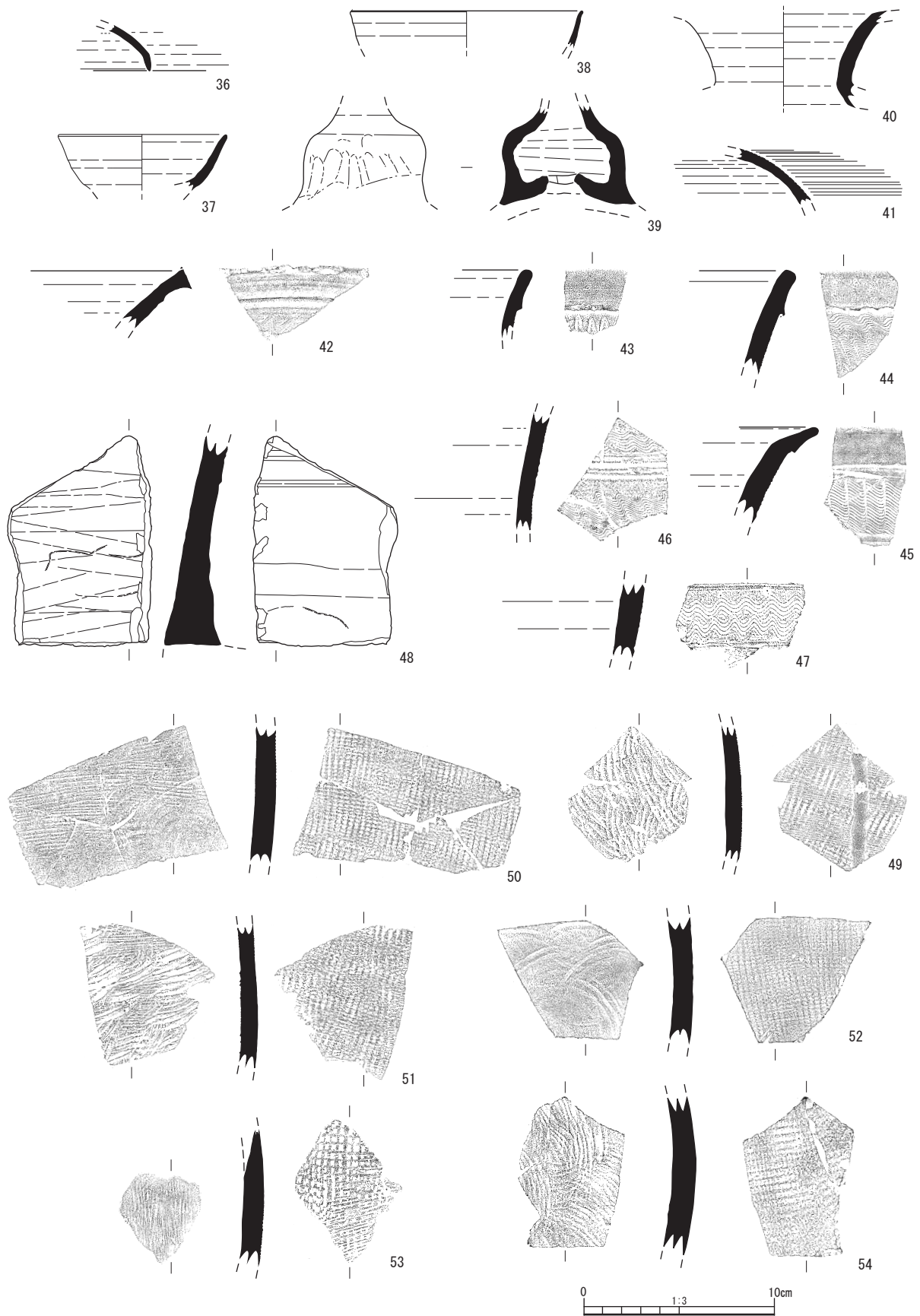
17・18は高台がつく坏Bの坏身である。17は復元底径9.2cm、18は口径14.8cm、器高5.5cm、底径8.5cmである。高台はいずれも広い底部の端につき、端部が外方へ広がる形態をなす。17は体部が緩やかな傾斜をもって口縁部につながる。高台の端部をヨコナデによりつまみ出し、底部外面をナデにより仕上げる。18は底部をヘラ切り後、丁寧なナデにより仕上げる。高台の端部は面をもつ。17は第3トレンチ流土出土、18は第3トレンチ流土と墳丘面直上の破片が接合した。

19～25は坏Aの坏身である。19～21は口縁端部が小さく外反する。21はナデ調整により底部のヘラ切りか糸切りかの判断は難しい。口径14.2cm、器高3.7cm、底径9.9cmである。22は口縁部上半が強く内湾する。22は復元口径11.8cm、23は復元口径12.8cmで、体部が緩やかにやや内湾して立ち上がる。24・25は底部に回転糸切りの痕跡をとどめる。25は口径12.9cm、器高4.2cm、底部径7.9cmであり、体部が直線的にやや外傾して立ち上がる。26は口径12.6cm、器高3.7cm、底径8.8cmに復元される。口縁端部をヨコナデにより小さく外反させるように観察されるが、磨滅が著しいためにはっきりしない。9は第3トレンチ流土、20・22～24は第1トレンチ流土、25は第1トレンチ流土から出土し、21は第1トレンチ表土と流土、第2トレンチ攪乱坑の破片、26は第1トレンチの流土と攪乱坑、墳丘面直上の破片が接合した。

27～29は小形の坏で、いわゆる灯明皿形土器である。27は口径8.8cm、器高2.9cm、底径5.6cmと器高が高く、口縁部上半が外反する。底部に回転糸切りの痕跡がある。28は口径9.7cm、器高2.6cm、底径7.2cmで、体部は緩やかに外反する。29は口径11.2cm、器高2.2cm、底径6.5cmで、口縁部が強く外反して水平に開く。いずれも内面に煤の付着はない。27・28は第1トレンチ流土と墳丘面直上の破片が接合し、29は第1トレンチ表土と攪乱坑、第3トレンチ流土の破片が接合した。

30～35は高坏である。このうち、30～34は大型の坏部をもつ無蓋高坏である。30は坏部外面に突帯をめぐらして口縁部と区画し、突帯の下に櫛描波状文をほどこす。31・32は口縁部であり、端部を丸くおさめる。32は復元口径17.0cmで、坏部が浅く大きく広がる。33・34には坏部と脚部の接合部が残る。33には透かしをあけた際の工具痕が残る、34には二方透かしがある。35は脚部であり、ナデののち外面にカキメをほどこす。脚端部が下方に突出する。30・34は墳頂トレンチSE区盛土、31・35は墳頂トレンチ盛土、32は第2トレンチ攪乱坑、33は第3トレンチ流土から出土した。

36は、口縁端部付近の破片であり、緩やかに内湾する体部をもつ。短頸壺などの蓋であろうか。第2トレンチ盛土から出土した。37は口縁部破片の下端に頸部につながる屈曲があり、口縁部にか



第27図 須恵器(2)

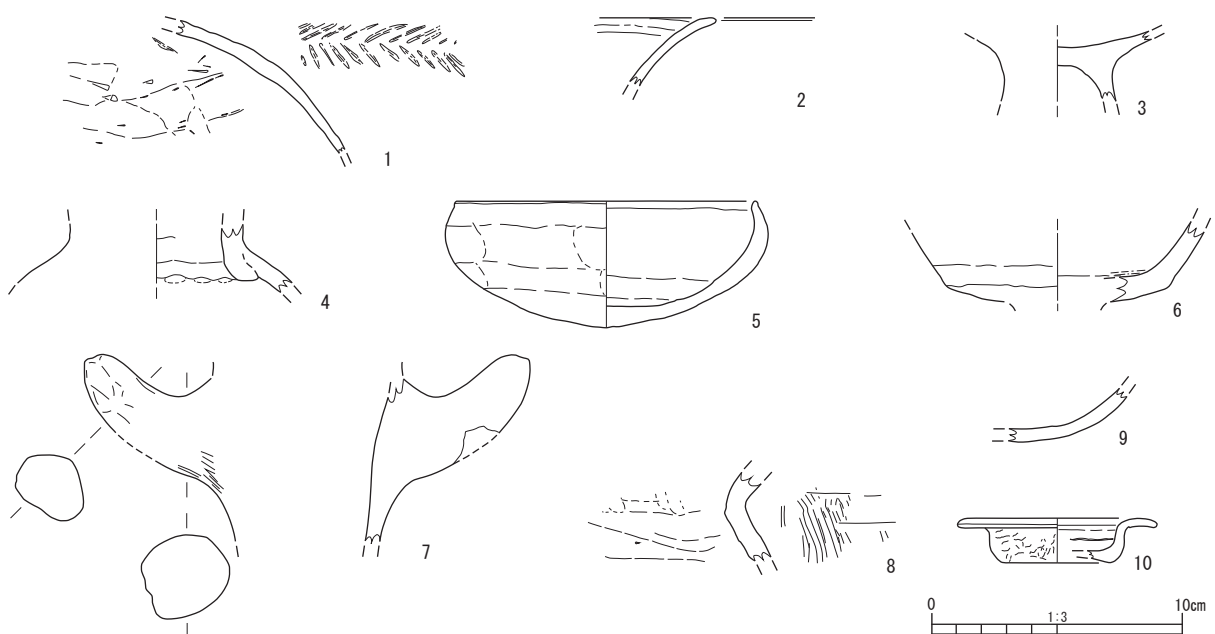
けての形態から甕の可能性はある。第1トレンチ流土と墳丘面直上の破片が接合した。38は口縁部が極端に薄いつくりである点から坏類とは考えにくく、壺類の口縁部などの可能性を考えておきたい。復元口径約12cmで口縁部はあまり広がらず、端部が外面へわずかに肥厚する。第2トレンチ攪乱坑から出土した。39は出雲型子持壺の子壺片である。口縁部を欠損し、全体にゆがみがある。底のある子壺を親壺に接合した後、子壺底部を棒状工具で穿孔する。第3トレンチ流土から出土した。40・41は壺瓶類の破片である。40は頸部片である。体部から剥離した痕跡があり、口縁部に向かって外反する。41は肩部であり、外面にカキメをほどこす。いずれも第4トレンチ流土から出土した。

42～54は甕の破片である。42～45は口縁部であり、端部直下の外面に突帯ないし段による区画をつくり、その下に櫛描波状文を入れる。42は突帯、43～45は段により区画する。46・47は頸部の破片で、櫛描波状文をほどこしたのち、凹線をめぐらす。48は頸部から口縁部にかけての破片で、外面の上部に2条の凹線をめぐらす。破片下面は剥離し、体部と口縁部を別々に製作して接合する。内外に接合時の充填粘土がみられる。49は外面に平行叩きがあり、その後にカキメをほどこす。内面に同心円文当具痕を残し、当具痕を弱くナデ消す。50～52・54は外面に格子風叩き、52はその上にカキメがある。いずれも内面に同心円文当具痕があり、50は当具痕の上にタテハケ、51はヨコハケがみられる。50は、タテハケの前にナデ消しもおこなう。52・54は当具痕を弱くナデ消すのみである。53は外面に格子叩きのちにカキメまたはヨコハケ、内面は同心円文当具痕にタテハケをかける。43・48・50・53は第6トレンチ流土、44・51・52は第4トレンチ流土、49は第3トレンチ流土と第6トレンチ盛土の破片が接合した。
(犬山・飯田・田中・佐々木)

(3) 土師器 (第28図、図版28)

土師器は須恵器に比べて出土量が少なく、全体的に遺存状態が悪い。古墳時代以降の幅広い時期のものがみられ、おおよそ古墳時代でも古相と新相を示すものに大別できる。確認できる器種としては、壺、器台、高坏、甗、甕、坏、皿がある。

1は壺の肩部片である。外面に羽状文をほどこし、内面にはヨコヘラケズリがみられる。羽状文が肩部にあることから、二重口縁壺と判断した。第5トレンチ盛土から出土した。



第28図 土師器

2は鼓形器台の受け部片である。口縁端部をユビナデによって薄くつまみ出す。外面の調整は不明瞭であり、口縁部内面にはヨコヘラミガキがみとめられる。第6トレンチ盛土から出土した。

3は高坏の坏部と脚部の接合部で、脚部内外面に粘土を付加して接合する。調整は磨滅により不明瞭である。第3トレンチ盛土から出土した。

なお、1～3はにぶい黄橙色を呈し、ほかの土師器と比べて色調が明るい。

4は壺の頸部片である。頸部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる直口壺と考える。外面は磨滅により調整不明瞭で、内面には指頭圧痕と粘土紐接合痕が残る。墳頂トレンチ盛土から出土した。

5は坏である。復元口径約12.0cm、器高約5.1cmである。底部は丸く、体部から口縁部が内湾する。口縁端部にヨコナデ、それ以下の外面はヨコヘラケズリをほどこす。内面調整は磨滅により不明瞭だが、底部にはヨコナデがみられる。第3トレンチ流土から出土した。

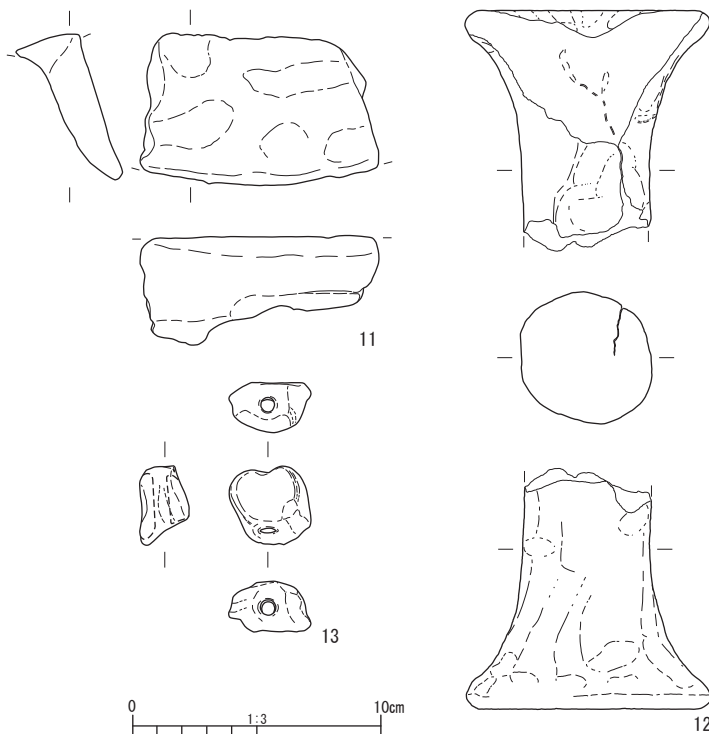
6は有稜高坏の坏部片である。ほぼ平坦な底部から、「く」字形に屈曲して、口縁部へと緩やかに立ち上がる。磨滅するが、内外面にヘラミガキをほどこす。墳頂トレンチ盛土から出土した。

7は甑の把手部片である。横断面は楕円形をなす。外面にユビナデと指頭圧痕が明瞭に残る。体部との接合部にタテハケがみとめられることから、把手を体部に接合したのち、ハケをほどこしたと考える。墳頂トレンチ攪乱坑から出土した。

8は甕の頸部片である。外面には一部にタテハケがみられる。内面の口縁部側をタテナデののちヨコナデ、体部にヨコヘラケズリをほどこす。第6トレンチ盛土から出土した。

9は皿の底部片である。外面調整は顕著ではない。内面はヨコナデである。第5トレンチ盛土から出土した。

10は皿である。復元口径約8.0cm、器高約1.8cm。口縁部をユビナデにより薄くし、底部は平坦である。外面の細かな凹凸は外型成形によるものと考えられる。内面調整は不明瞭。内面に煤が付着する。灯明皿として使用されたのであろう。第1トレンチ流土と攪乱坑の破片が接合した。(笠見・佐藤・高橋)



第29図 土製品

(4) 土製品 (第29図、図版28)
土製品には、甕、土製支脚、土器片、土器片、土器片がある。

11は移動式甕の底部片である。外面は全体的にユビナデをほどこし、体部との接合部分もナデが残る。第1トレンチ表土から出土した。

12は土製支脚片で、上部を欠損し、底部も破損する。胴部を縦方向のユビナデで成形し、裾部に指頭圧痕がみられる。底部は上げ底となり、指頭圧痕と棒状工具圧痕を残す。外面の一部に煤が付着する。胴部外面には接合痕が明瞭にみられ、粘土板を巻いて成形したことがわかる。第3トレンチ流土から出土した。

13は土器片錘である。重さ約15g、

縦軸 3.2 cm、横軸 3.4 cm、最大厚 2.0 cm である。磨滅が激しく、調整は確認できない。縦軸方向に径約 6 mm の穿孔があり、土器片の転用錘と考える。孔口に向かってめぐる幅 2～4 mm の溝状の凹みは、網への固定にともなう使用痕であろうか。第 7 トレンチ盛土から出土した。(笠見・佐藤・高橋)

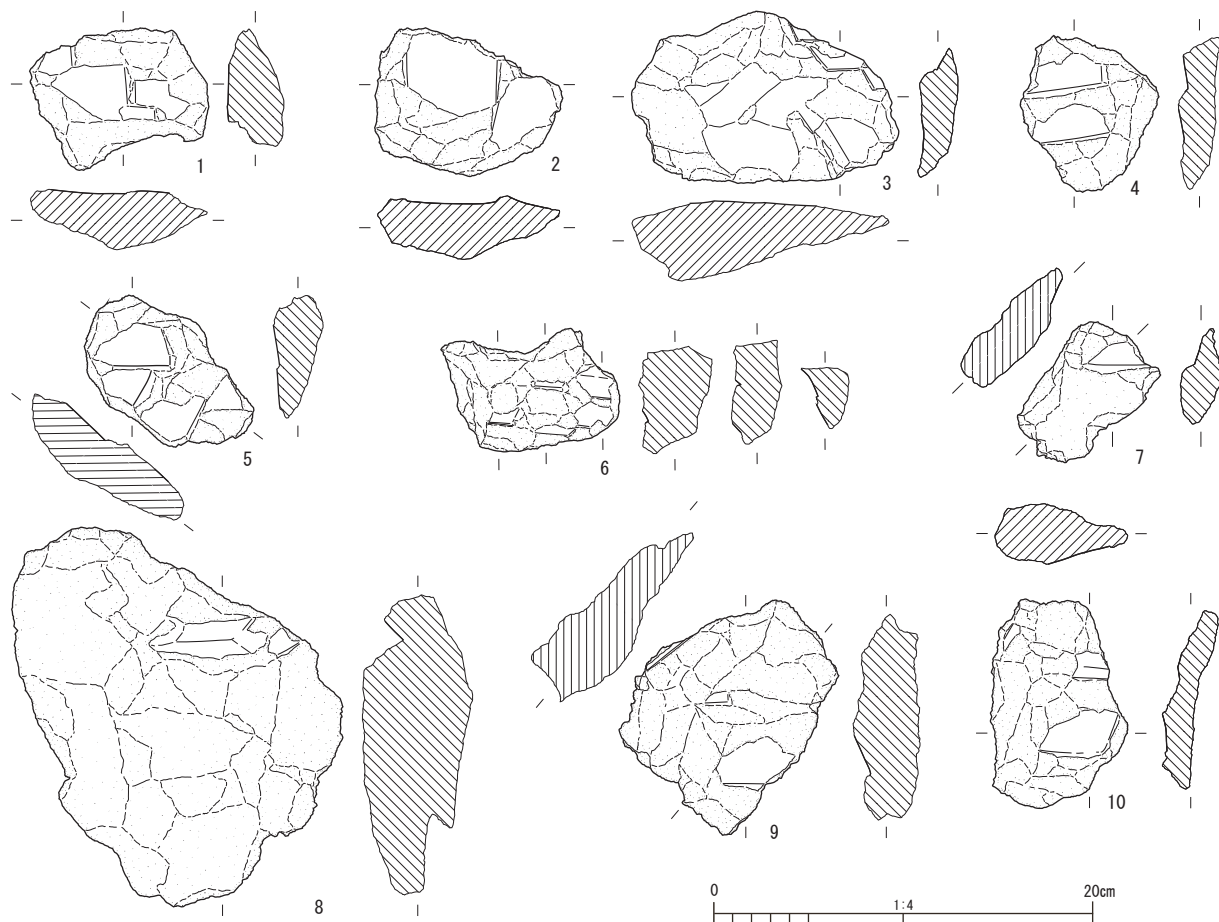
(5) 石材加工剥片 (第 30 図、図版 29)

玄室棺身を設置した層の直上から、流紋岩質軽石火山礫凝灰岩 (通称：荒島石) の破片がまとまって出土した。これらの凝灰岩片は盛土中に間層を形成する。幅 50 cm のサブトレンチに限られるが、第 5 トレンチ北壁 33 層から 2332 g、第 6 トレンチ北壁 55 層から 4687 g が出土した。

石材の大きさは、長径、短径ともに 0.5 cm 程度から、長径 18 cm 程度、短径 16 cm 程度までと幅広く存在し、長辺 5 cm 以下と短辺 4 cm 以下までを主体とする。全面が破面を呈する破片がほとんどであり、粉碎されたものが多いが、最小でも長辺約 8 cm、短辺約 5 cm と相対的に大きな石材に工具痕を残すものがある。

1～5 は第 5 トレンチ北壁 33 層から出土した。1 は長径 9.5 cm × 短径 7.5 cm × 厚さ 3 cm である。2 は長径 10 cm × 短径 8 cm × 厚さ 2.5 cm で、幅約 5 cm の工具痕が残る。3 は長径 14 cm × 短径 9 cm × 厚さ 4 cm で平滑な面があり、その範囲全体にチョウナ削り技法を確認できる。4 は長径 8.7 cm × 短径 7.7 cm × 厚さ 3 cm、5 は長径 10 cm × 短径 6.5 cm × 厚さ 3 cm である。3～5 は工具の深く入る部分があり、チョウナ敲打技法によるものと考えられる。

6～10 は第 6 トレンチ北壁 55 層から出土した。6 は長径 9.5 cm × 短径 7 cm × 厚さ 4 cm であり、幅



第 30 図 石材加工剥片

約1.5cmの深くにまで達する工具痕が残る。7は長径8cm×短径5.2cm×厚さ3cm、8は長径21cm×短径16cm×厚さ6cmと加工剥片中もっとも大きく、9は長径11.7cm×短径9.5cm×厚さ4.7cm、10は長径11.7cm×短径7.3cm×厚さ4cmである。7～10にはチョウナ敲打技法を確認できる。

いずれの石材も工具痕の残る面は一面に限られ、そのほかは剥離された面となるため、工具によって加工した面を剥離したものとする。工具幅の明らかなものは、玄室に残された工具痕と一致する。また、加工剥片は玄室に用いられる石材と共通し、玄室設置面の直上で出土したことから玄室棺身の加工にともなうものとみてよい。チョウナ敲打技法やチョウナ削り技法を用いた粗造りや仕上げだけでなく、加工面を現地で大きく剥離する工程が存在したと考える。(磯貝)

(6) 出土遺物の位置づけ

① 須恵器 (第26・27図)

ここでは須恵器の年代的な位置を明らかにし、そこから古墳の築造年代を探ることにしたい。時期比定についてはひとまず、古墳時代資料を中心とした出雲編年〔大谷1994・2001〕、7～9世紀を対象とした古代出雲編年〔岡田ほか2010〕、出雲国府資料にもとづく編年〔稲田2013〕にしたがう⁽²⁾。また、いわゆる灯明皿形土器については、古代出雲編年との併行関係を示した案〔川原2010〕を参考とした。

個別資料の位置づけ⁽³⁾ 坏H蓋の1～4は、肩部の稜、天井部の回転ヘラケズリ、口縁端部形態から、出雲1期と判断する。5は肩部の稜の突出と、口縁部の立ち上がりが弱く、出雲2期であろう。

坏H身の6～11は、口縁部立ち上がり形態から、ほぼ垂直な6・7を出雲1期、やや内傾する8・9を出雲2～3期、著しく内傾する10・11をおおよそ出雲4期とみる。

坏G蓋の12は、身受けのかえりから、出雲6b・c～6d期、古代出雲I～II期、国府第1型式となろう。

坏B蓋の13は、身受けのかえりから、出雲6d期、古代出雲II期、国府第1型式に相当する。14～16は輪状つまみから、出雲(6d～)7・8期、古代出雲II～III期、国府第1～2型式にあたる。

坏B身の17は、直線的に開く体部と丁寧なヨコナデをほどこす高く裾広がりとなる高台から、出雲6d期、古代出雲II期、国府第1型式に相当する。18は、体部の立ち上がりが内湾し、端部に面をもつ高さのある高台から、出雲7・8期、古代出雲III期、国府第2型式にあたる。

坏A身の19～26は、体部の立ち上がり、口縁部の形態から、出雲7～8期以降、古代出雲II期以降、国府第2型式以降にあたる。このうち、19は口縁部の外反が強く、古代出雲II期と古相を示す可能性があり、それ以外は出雲7・8期以降、古代出雲III期以降、国府第2型式以降と考える。

小形の坏いわゆる灯明皿形土器は、高さのある27・28が出雲7・8期、古代出雲III期、国府第2型式とみられ、器高の低い29が若干新相を示すと考えられる。

無蓋高坏の29は、突帯を設けて楯描波状文めぐらす点から、出雲1期とみる。31・32は、口縁部形態から、出雲5期以降、古代出雲I～II期、国府第1型式となる。33は透かしの切り込み痕跡から出雲5期以降、古代出雲I～II期、34は二方透かしから出雲4期以降である。35は脚端部形状から、出雲1期に相当する。

39の子持壺は、底あり子壺を親壺に接合し、穿孔をほどこすもので、穿孔方法はb手法〔柳浦1993〕である。型式としてはC型に相当し、出雲4期を中心とした時期に位置づけられる〔池淵2004〕。

出土状況と遺物の時期相 つぎに、出土状況と遺物の年代の関係を検討する。盛土から出土した須恵器(4・6・9・10・30・31・34・35)の年代は、出雲1期から出雲6d期、古代出雲II期、国府

第1型式までとなる。ただし、盛土出土資料は破片が多いために、個々の資料の年代を絞り込むことが難しく、時期比定に幅をもたせざるを得ない例がほとんどである。実際には、出雲6d期、古代出雲Ⅱ期、国府第1型式にまで下らない可能性もある。確実な下限は、高坏(31)の口縁部片から想定される出雲5期に求められる。いっぽう、墳丘面直上の資料(14～16・18・22・26～28)は、出雲7・8期、古代出雲Ⅲ期、出雲国府第2型式に位置づけられるものでまとまりをみせる。

なお、古墳築造に先立つ遺構から、出雲1期に位置づけられる坏片が出土しており、古墳時代中期後半以降の周辺での土地利用をうかがわせる。

須恵器からみた廻原1号墳の築造年代 上述したように、遺物の年代と出土状況に対応関係をみとめるのは、墳丘面直上から出土した資料群である。それらは、石室前庭部や墳丘南東部裾付近から比較的良好的な遺存状態で複数がともなうて出土している点から、大きく原位置を損なうような状態ではないと考える。

ただし、出雲7・8期、古代出雲Ⅲ期、出雲国府第2型式は近畿地方でいう平城Ⅰ・Ⅱに併行するとされ〔稲田2013〕、これを古墳の築造時期とみるのは難がある。というのは、発掘調査で得られた考古学的な材料から、これらの須恵器の年代が古墳の築造時期に結びつかないという積極的な根拠を示すことはできないが、廻原1号墳の築造時期を引き下げることが出雲東部地域の首長墓の築造動向に空白期間を設けることになるばかりか、周辺の群集墳の主たる築造終了時期とも年代的な懸隔を考慮せねばならないなどの問題が生ずるからである。

前庭部ならびに墳丘裾部において出土した土器は、複数個体が存在し、かつ出土地点を異にしながらも、年代が一時期にまとまるなど関連性が強い資料群ととらえうる。とくに墳丘裾という埋葬から乖離した場所と一体性をもって出土した点は、これらが埋葬にともなうのではなく、古墳という構築物を対象として配置された土器群であった可能性を示唆する。

こうした前庭部や墳丘裾における坏類を中心とした組成の須恵器の出土について、主として畿内地域での検討事例ではあるが、埋葬目的以外の祖霊祭祀など墓前祭祀や追善供養を積極的にみとめる理解がある〔渡邊1999〕。同様の事例は、廻原1号墳の近隣に位置するイガラビ古墳群や池ノ奥古墳群でも〔岡崎ほか1990a・b〕、築造時期より時期の降る須恵器が一定量出土するという状況として確認できる。また、少し視野を広げて出雲地域あるいは山陰地方という範囲においても、古墳の築造年代よりも新しい須恵器坏類が一定時期におよぶ組成をなして出土する事例は存在する。すなわち、古墳の築造以降に、継続的な祭祀を須恵器坏類を用いた行為によって執行することは、むしろ通有のことであったとみられる。そうであるならば、廻原1号墳の前庭部と墳丘裾から出土した須恵器も、古墳築造後の祖霊祭祀や追善供養にともなうものである可能性はきわめて高い。したがって、出雲7・8期、古代出雲Ⅲ期、出雲国府第2型式という位置づけは古墳の築造下限年代を示すにすぎず、少なくとも古墳の築造年代はこれを遡ると考えられる。(犬山・飯田)

② 土師器 (第28図)

1は頸部に羽状文をもつ複合口縁壺とは異なり、羽状文が肩部に配されることから、二重口縁壺と判断できる。類例が小谷2式段階⁽⁴⁾の夫敷遺跡旧河道〔廣江・板垣・桑原1989〕、小谷4式段階の陽徳遺跡Ⅱ区1号墳〔丹羽野ほか1995〕にある。

2の鼓形器台は、口縁部が外反して開き、端部が面をもたずに水平に薄く引き出されるような形態である。その特徴から、小谷3式には下らず、小谷2式におさまるとみてよいだろう。

5の坏は、丸みのある底部に外面へラケズリをほどこす形式である。口縁部が内湾し、端部を丸く

おさめる特徴は、古墳時代中期末の土器様相とみられる。同様の土器様相は三田谷遺跡SI 08・09〔今岡・梶田（編）1999〕と共通し、直口壺（4）と有稜高坏（6）の類例もそこに確認できる。須恵器でいう出雲1期新相〔大谷2003〕に併行する時期と考えられる。

以上のように、土師器の年代的なまとまりは、古墳時代前期前半（小谷2式段階）と中期末（須恵器出雲1期新相併行）にみとめられ、近辺に古墳に先行する遺跡の存在をうかがわせる。（笠見・佐藤）

③ 土製品（第29図）

11は移動式竈であり、出雲地域では須恵器編年の出雲3期以降に増加するという〔加藤2005〕。12の土製支脚は、山陰においては須恵器編年の出雲3期以降に出現するとされる〔岩橋2003〕。

土製支脚と移動式竈はともに古墳時代後期後半に位置づけられる。したがって、この時期に古墳の周辺には集落などが存在した可能性がある。（笠見・佐藤）

註

- (1) 以下、石材の加工技術については、和田晴吾の分類と呼称に準じて説明する〔和田1983〕。
- (2) 出雲地域の須恵器について以下で言及する場合は、〔大谷2001〕、〔岡田ほか2010〕、〔稲田2013〕の時期区分もしくは型式名を使用する。
- (3) なお、いくつかの資料の出土層位について、これまでに刊行した概報と異なるところがある点には注意されたい〔島根大学法文学部考古学研究室2012・2013〕。この認識の変更は、調査が進展する過程において土層の解釈について認識をあらためたにもかかわらず、その時点ですでに出土していた遺物にその土層認識の変更を反映するに至らなかったために生じたものである。本書作成過程の整理事業では、こうした問題となりうる点をいま一度確認する作業を実施し、不備がないように努めた。
- (4) 土師器の編年的位置づけについては、〔松山2002・2015〕ならびに〔池淵2008〕を参考とした。

引用文献

- 池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会 pp. 497-516
- 池淵俊一 2008「Ⅲ・Ⅳ区出土土師器群の編年的位置」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 島根県埋蔵文化財調査センター pp. 294-304
- 稲田陽介 2013「第10章 出土遺物の様相」『出雲国府跡—9 総括編—』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 島根県教育委員会 pp. 201-282
- 今岡一三・梶田勝造（編）1999『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.1）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 島根県教育委員会
- 岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について—土製支脚・移動式竈を中心として—」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター pp. 55-81
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 pp. 39-82
- 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 島根県出雲土木建築事務所・島根県平田市教育委員会 pp. 43-54
- 大谷晃二 2003「古墳群とその時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp. 134-146
- 岡崎雄二郎・中尾秀信・藤原裕子・庄司健太郎・瀬古諒子ほか（編）1990a 「イガラビ古墳群」『鈿田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡』（『島根県松江市松江東工業団地内発掘調査報告書』）松江市・松江市教育委員会 pp. 209-334
- 岡崎雄二郎・中尾秀信・藤原裕子・庄司健太郎・瀬古諒子ほか（編）1990b 「池ノ奥古墳群」『鈿田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡』（『島根県松江市松江東工

- 業団地内発掘調査報告書』 松江市・松江市教育委員会 pp. 337-412
- 岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究—古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター pp. 13-43
- 加藤裕一 2005「5章 まとめ」『名和中畝遺跡』一般国道9号（名和淀江道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX 財団法人鳥取県教育文化財団 pp. 54-60
- 川原和人 2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究—古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター pp. 103-122
- 島根大学法文学部考古学研究室 2012「島根県松江市廻原1号墳発掘調査概要報告I」『山陰研究』第5号 島根大学法文学部山陰研究センター pp. 73-94
- 島根大学法文学部考古学研究室 2013「島根県松江市廻原1号墳発掘調査概要報告II」『山陰研究』第6号 島根大学法文学部山陰研究センター pp. 109-124
- 丹羽野裕ほか 1995『陽徳遺跡・平ラI遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11 島根県教育委員会
- 廣江耕史・板垣旭・桑原真治 1989『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI（夫敷遺跡）』島根県教育委員会
- 松山智弘 2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』島根県加茂町教育委員会 pp. 198-209
- 松山智弘 2015「山陰」『前期古墳編年を再考するII～古墳出土土器をめぐって～』中国四国前方後円墳研究会 第18回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 pp. 37-128
- 柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 10周年記念特集号 島根考古学会 pp. 13-37
- 和田晴吾 1983「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会 pp. 501-534
- 渡邊邦雄 1999「8・9世紀の古墳祭祀—畿内における横穴式石室の再利用を中心として—」『古代文化』第51巻第11・12号 財団法人古代学協会 pp. 3-19・43-58

第3表 須恵器観察表

No.	器種	Tr.	層位	部位 残存率	法量 (cm)			製作技法	胎土		焼成	色調	備考
					口径	器高	底径		粗密	含有物			
1	坏H蓋	13	流土	4/5	12.5	5.2	12.6	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	～3mm長石微量	やや不良	外：5Y7/2 灰白 内：5Y6/2 灰オリーブ	
2	坏H蓋	1	流土 墳丘直上	天井部 1/5	13.0	(3.4)	—	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	～0.5mm黒色粒・～1mm長石微量	やや不良	外：7.5Y6/1 灰 内：7.5Y6/1 灰	
3	坏H蓋	5	墳丘下層遺構	天井部 破片	—	(3.0)	—	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：7.5Y7/1 灰白 内：5Y7/1 灰白	墳丘下層遺構埋土(北壁44層)出土
4	坏H蓋	填頂(SE)	盛土	口縁部 破片	—	(3.6)	—	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石・黄白色粒少量	良好	外：7.5Y5/1 灰 内：N7/0 灰白	
5	坏H蓋	3	流土 攪乱	口縁部 破片	—	(3.2)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	10Y6/1 灰	
6	坏H身	填頂(SE)1	盛土	口縁部 1/5	13.6	(4.2)	—	外：回転ナデ→底部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石多量	良好	外：N6/0 灰 内：10YR7/1 灰白	
7	坏H身	1	攪乱	口縁部 破片	—	(3.4)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：10Y6/1 灰 内：7.5Y7/1 灰	
8	坏H身	1	攪乱	口縁部 破片	—	(2.2)	—	外：回転ナデ→受け部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	10Y6/1 灰	
9	坏H身	6	盛土	口縁部 破片	—	(3.6)	—	外：回転ナデ→底部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：5Y7/2 灰白 内：5Y6/1 灰	ロクロ時計回り
10	坏H身	6	盛土	口縁部 破片	—	(1.7)	—	外：回転ナデ→受け部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～1mm長石少量	良好	外：2.5YR5/2 暗灰黄 内：5Y7/1 灰白	
11	坏H身	3	表土	口縁部 破片	—	(1.8)	—	外：回転ナデ→受け部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	外：10Y7/1 灰白 内：7.5Y6/1 灰	
12	坏G蓋	3	流土	口縁部 破片	—	(1.3)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→かえりヨコナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：5Y5/1 灰 内：5Y6/1 灰白	
13	坏B蓋	7	表土	口縁部 破片	—	(1.6)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm黒色粒微量	良好	外：2.5YR6/2 灰黄 内：10YR6/1 灰	
14	坏B蓋	1	墳丘直上	9/10	14.2	2.8	14.4	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→天井部仕上げナデ	密	～1mm長石やや少量	良好	外：7.5Y6/1 灰オリーブ 内：2.5Y6/1 黄灰	ロクロ時計回り
15	坏B蓋	1	墳丘直上	1/4	15.0	2.5	15.3	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	～1mm長石やや少量	良好	外：10Y5/1 灰 内：5Y6/2 灰オリーブ	外面に「X」のヘラ記号
16	坏B蓋	1	墳丘直上	1/3	16.5	3.7	17.0	外：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→天井部仕上げナデ	密	～1mm長石やや少量	やや不良	外：7.5Y6/1 灰 内：2.5Y6/2 灰黄	ロクロ時計回り
17	坏B身	3	流土	底部 1/6	—	(3.4)	9.3	外：回転ナデ→高台ヨコナデ 内：回転ナデ	密	1mm程度長石少量・白色粒多量	良好	外：10Y5/1 灰 内：2.5Y6/1 黄灰	
18	坏B身	3	流土 墳丘直上	4/5	14.8	5.5	8.5	外：回転ナデ→高台ヨコナデ・底部ヘラ切り→底部仕上げナデ 内：回転ナデ→底部仕上げナデ	密	～2mm長石少量	やや不良	5Y7/2 灰白	
19	坏A身	3	流土	口縁部 破片	—	(2.2)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石・黒色粒微量	良好	外：10Y6/2 灰オリーブ 内：7.5Y6/1 灰	一部黒変(重ね焼き痕)
20	坏A身	1	流土	口縁部 破片	12.8	(2.9)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：5Y6/1 灰 内：7.5YR6/1 灰	
21	坏A身	1 1 2	表土 流土 攪乱	1/5	14.2	3.7	9.9	外：回転ナデ→底部仕上げナデ・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	5Y6/1 灰	一部黒変(重ね焼き痕)、底部ナデ丁寧
22	坏A身	1	墳丘直上	口縁部 破片	—	(2.6)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	外：7.5Y5/1 灰 内：5Y5/1 灰	
23	坏A身	1	流土	口縁部 破片	12.8	(3.2)	—	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～0.5mm長石微量	良好	外：5Y5/2 灰オリーブ 内：7.5Y5/1 灰	一部黒変(重ね焼き痕)
24	坏A身	1	流土	底部 2/3	—	(1.8)	8.0	外：回転ナデ→底部回転糸切り 内：回転ナデ	密	～2mm長石微量	良好	外：5Y5/2 灰オリーブ 内：5Y5/1 灰	
25	坏A身	1	流土	7/10	12.9	4.2	7.9	外：回転ナデ→底部回転糸切り・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	～2mm長石微量	良好	5Y5/1 灰	
26	坏	1	流土 攪乱 墳丘直上	1/2	12.6	3.7	8.8	外：回転ナデ→口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～2mm長石微量	不良	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y6/3 にぶい黄 断：2.5Y7/4 浅黄	磨滅により調整不明瞭
27	坏	1	流土 墳丘直上	4/5	8.8	2.9	5.6	外：回転ナデ→底部回転糸切り・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石微量	良好	5Y6/1 灰	灯明皿形土器外面一部黒変
28	坏	1	流土 墳丘直上	4/5	9.7	2.6	7.2	外：回転ナデ→底部回転糸切り・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→底部仕上げナデ	密	～1mm長石微量	良好	外：7.5Y6/2 灰オリーブ 内：2.5Y6/3 にぶい黄	灯明皿形土器漆状物質一部付着

No.	器種	Tr.	層位	部位 残存率	法量 (cm)			製作技法	胎土		焼成	色調	備考
					口径	器高	底径		粗密	含有物			
29	坏	1 1 3	表土 攪乱 流土	完形	11.2	2.2	6.5	外：回転ナデ→底部回転系切り・ 口縁端部ヨコナデ 内：自然軸付着により不明瞭	密	～1mm長石 微量	良好	外：10Y6/2 灰白 内：5Y5/1 灰	灯明皿形土器
30	高坏	墳頂 (SE)	盛土	坏部 破片	—	(3.1)	—	外：突帯ヨコナデ→櫛描波状文 内：回転ナデ	密	～0.5mm 長石微量	良好	外：5Y4/1 灰 内：5Y6/2 灰オリブ	
31	高坏	墳頂	盛土	口縁部 破片	—	(2.6)	—	外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ 外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～1mm長石 多量	やや 良好	外：7.5Y3/1 オリブ黒 内：10Y4/1 灰	
32	高坏	2	攪乱	口縁部 破片	13.0	(2.8)	—	外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～1mm長石 少量	やや 良好	外：7.5Y6/1 灰 内：2.5Y5/2 暗灰黄	
33	高坏	3	流土	接合部 破片	—	(3.6)	—	外：回転ナデ→底部回転ヘラケズリ →接合部ヨコナデ 内：回転ナデ→仕上げナデ	やや 密	～3mm長石 微量	良好	外：5Y5/1 灰 内：2.5Y6/2 灰黄	透かしの切り 込み工具痕
34	高坏	墳頂 (SE)	盛土	接合部 破片	—	(2.9)	—	外：回転ナデ→接合部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～1mm長石・ 石英少量	やや 不良	7.5Y7/1 灰白	二方透かし
35	高坏	墳頂	盛土	脚部 破片	—	(4.8)	—	外：回転ナデ→ カキメ・脚部ヨコナデ 内：回転ナデ	密	～2mm長石 やや多量	やや 良好	7.5Y5/1 灰	
36	壺蓋 か	2	盛土	口縁部 破片	—	(2.6)	—	外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～0.5mm 長石微量	良好	外：10GY8/1 明緑灰 内：N6/0 灰 断：2.5YR6/2 灰赤	墳丘盛土（東 壁9層）出土
37	甕	1	流土 墳丘 直上	口縁部 1/4	8.7	(3.2)	—	外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～1mm長石 やや少量	良好	外：5Y5/1 灰 内：2.5Y5/3 黄褐	
38	壺瓶 類	2	攪乱	口縁部 破片	12.2	(2.0)	—	外：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～0.5mm 長石微量	良好	外：N4/0 灰 内：5Y7/1 灰白	薄造り、口縁 端部外面肥厚
39	子持 壺	3	流土	子壺 1/3	6.4	(5.1)	—	外：回転ナデ→接合部不定方向ナデ 内：回転ナデ→底部穿孔	密	～0.5mm 長石微量	やや 不良	外：7.5Y5/1 灰 内：5Y6/1 灰	棒状工具 による穿孔
40	壺瓶 類	4	流土	頸部 1/3	—	(4.9)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	～1mm長石・ 黒色粒微量	良好	外：2.5Y5/2 暗灰黄 内：10Y5/1 灰	提瓶か
41	壺瓶 類	4	流土	肩部 1/6	—	(2.8)	—	外：カキメ 内：回転ナデ	密	～0.5mm 長石中量	良好	外：2.5Y5/1 黄灰 内：5Y6/1 灰	
42	甕	1	表土	口縁部 破片	—	(3.7)	—	外：回転ナデ→ 櫛描波状文・口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～0.5mm 長石少量	良好	外：10Y5/1 灰 内：2.5Y6/2 灰黄	
43	甕	6	流土	口縁部 破片	—	(3.4)	—	外：回転ナデ→突帯ヨコナデ→ 櫛描波状文・口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～2mm長石 少量	良好	外：N6/0 灰 内：10YR7/3 にぶい黄橙	
44	甕	4	流土	口縁部 破片	—	(6.1)	—	外：回転ナデ→ 櫛描波状文・口縁端部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁端部ヨコナデ	密	～0.5mm 長石微量	良好	外：10YR4/1 褐灰 内：2.5YR 黄灰	
45	甕	3	流土	口縁部 破片	—	(5.0)	—	外：回転ナデ→櫛描波状文→ 凹線・口縁部ヨコナデ 内：回転ナデ→口縁部ヨコナデ	密	～1mm長石 微量	良好	外：N4/1 灰色 内：5Y7/1 灰白	
46	甕	1	攪乱	頸部 破片	—	(5.8)	—	外：回転ナデ→櫛描波状文→凹線 内：回転ナデ	密	～1mm長石 微量	良好	外：N6/1 灰 内：2.5Y6/2 灰黄	
47	甕	3	流土	頸部 破片	—	(3.6)	—	外：回転ナデ→櫛描波状文→凹線 内：回転ナデ	密	～1mm長石 微量	良好	外：5Y5/1 灰色 内：5Y7/1 灰白	
48	甕	6	流土	口縁部 ～頸部 破片	—	(10.8)	—	外：回転ナデ→凹線・頸部ナデ 内：回転ナデ→頸部ナデ	密	～2mm白色 粒微量	やや 良好	外：5Y5/1 灰 内：2.5Y6/3 にぶい黄	
49	甕	3 6	流土 盛土	体部 破片	—	(6.8)	—	外：平行叩き→カキメ 内：同心円文当具痕→ナデ	密	～2mm長石 微量	良好	外：2.5Y5/1 黄灰 内：10YR6/4 にぶい黄橙	外面一部に 自然釉
50	甕	6	流土	体部 破片	—	(6.9)	—	外：格子風叩き 内：同心円文当具痕→タテハケ	密	～2mm長石 微量	良好	外：7.5Y5/1 灰 内：7.5Y6/1 灰	
51	甕	4	流土	体部 破片	—	(3.2)	—	外：格子風叩き→カキメ 内：同心円文当具痕→ヨコハケ	密	～1mm長石 やや少量	良好	外：5Y5/1 灰 内：N7/0 灰白	
52	甕	4	流土	体部 破片	—	(6.4)	—	外：格子風叩き 内：同心円文当具痕→ナデ	密	～2mm長石 微量	良好	外：2.5Y5/1 黄灰 内：5Y6/1 灰	
53	甕	6	流土	体部 破片	—	(7.9)	—	外：格子叩き→ヨコハケ 内：ナデ→タテハケ	密	～1mm長石・ 石英微量	不良	外：7.5Y7/1 灰白 内：2.5Y8/3 淡黄	
54	甕	墳頂 (NE)	盛土	体部 破片	—	(4.7)	—	外：格子風叩き 内：同心円文当具痕	密	～3mm長石 少量	良好	外：5Y7/1 灰白 内：7.5Y7/1 灰黄	

[凡例] < Tr. > トレンチ番号を記載。併記したものは異なる出土地点の接合資料。墳頂 () 内はトレンチを四分した区画。NE が北東、NW が北西、SE が南東、SW が南西に位置する。

< 法量 > () は残存高。坏Hの口径は受け部径、坏蓋の底径は天井部径、子持壺の底径は子壺胴部最大径を表記。

第4表 土師器観察表

No.	器種	Tr.	層位	部位 残存率	法量 (cm)			製作技法	胎土		焼成	色調	備考
					口径	器高	底径		粗密	含有物			
1	二重口縁壺	5	盛土	肩部破片	—	(5.3)	—	外：肩部羽状文 内：ヨコヘラケズリ	密	～1mm長石・ 石英微量	やや不良	10YR8/4 浅黄橙	
2	鼓形器台	6	盛土	受け部破片	—	(2.7)	—	外：口縁端部ヨコナデ 内：口縁部ヨコヘラミガキ	密	～1mm長石・ 金雲母・黒雲母少量	やや良好	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR7/6 明黄褐	
3	高坏	3	盛土	坏部～ 脚部破片	—	(2.8)	—	脚部内外面に粘土充填 磨滅により調整不明瞭	密	～1mm長石・ 金雲母・黒色粒微量	やや不良	7.5YR7/6 橙	接合部 径4.5cm
4	直口壺	墳頂	盛土	頸部 1/4	—	(2.8)	—	外：磨滅により調整不明瞭 内：頸部指頭圧痕、粘土紐接合痕	密	～2mm長石 微量	良好	7.5YR7/8 黄橙	頸部復元 径6.0cm
5	坏	3	流土	1/3	12.0	5.1	—	外：口縁部ヨコナデ→ 体部ヨコヘラケズリ 内：底部ヨコナデ	密	～3mm長石・ 石英少量	良好	外：10YR7/6 明黄褐 部分的に5YR6/8 橙 内：5YR6/8 橙	
6	有稜高坏	墳頂	盛土	坏部 1/5	—	(3.3)	—	外：磨滅により調整不明瞭 内：ヨコヘラミガキ	密	～2mm長石・ 石英少量	良好	10YR6/6 明黄褐	
7	甌	墳頂(SW)	攪乱	把手部 破片	—	(7.5)	—	外：ユピナデ・指頭圧痕→タテハケ 内：磨滅により不明瞭	密	～1mm長石・ 石英少量	良好	外：10YR7/6 明黄褐 内：5YR7/6 橙	
8	甕	6	盛土	頸部 破片	—	(3.5)	—	外：体部タテハケ→頸部ヨコナデ 内：頸部以上タテナデ→ 以下ヨコナデ→ヨコヘラケズリ	密	～1mm長石・ ～2mm石英 微量	良好	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/6 橙	
9	皿	5	盛土	底部 1/3	—	(1.7)	5.0	外：磨滅により調整不明瞭 内：ヨコナデ	密	～0.5mm 長石・金雲 母微量	良好	外：10YR5/4 にぶい黄褐 内：10YR8/4 浅黄	
10	皿	1	流土 攪乱	1/5	8.0	1.8	4.4	外：外型成形（外面に微細な凹凸） →口縁部ヨコナデ	密	～0.5mm 長石少量	良好	7.5YR6/6 橙	内面煤付着

[凡例] < Tr. > トレンチ番号を記載。墳頂 () 内はトレンチを四分した区画。NEが北東、NWが北西、SEが南東、SWが南西に位置する。
< 法量 > () は残存高。

第5表 土製品観察表

No.	器種	Tr.	層位	部位 残存率	法量 (cm)			製作技法	胎土		焼成	色調	備考
					口径	器高	底径		粗密	含有物			
1	移動式竈	1	表土	底部 破片	—	(4.3)	—	ユピナデ	やや粗	～1mm石英 微量	良好	10YR6/6 明黄褐	
2	土製支脚	3	流土	胴部～ 底部 1/2	—	(9.8)	9.9	粘土板巻きつけ成形→胴部タテナデ →裾底部指頭圧痕・棒状工具圧痕	粗	～2mm長石・ 石英微量	良好	2.5YR7/3 浅黄 一部5YR7/8 橙	上げ底、 煤付着
3	土器片錘	7	盛土	ほぼ 完形	—	—	—	径約6mmの穿孔	やや粗	～2mm長石・ 石英少量	良好	10YR8/4 浅黄橙	重さ：15g 縦軸：3.2cm 横軸：3.4cm 厚さ：2.0cm

[凡例] < Tr. > トレンチ番号を記載。
< 法量 > () は残存高。